# ６、歪んだ輪

　だが、彼は正式に風神を信仰しているわけでもないし、この感謝がお門違いな結果と交錯していたとしても奇跡の力に対して言いがかりをつけられる立場ではない。――彼らはそれなりに意気揚々と、しかも全くの危険も無く迷いもせず、順風満帆で拠点に帰り着いた。それは、密林の奥地で息を潜めてはいたが祖先の時代に学んだ憎しみもすっかり風化してしまい、血に混じっている他種族への懐っこさを全開にして少年達と交流したあの謎の部族が、おそらく土着の神か何かだろうが、客人の道中息災を願ってくれたおかげであったかもしれない。

しかも首尾よく兵士達の到着の一日前に着いて、彼らが数人がかりで、うんしょこらしょと運ぶ加環の数に表れている冒険の大成功を笑顔で迎えてやることができた。しかし、幸運に彩られているかのような事態の流れも、それなりに平均値の辺りを個性の波形が彷徨ってはいるが、一応ここまで本稿の中心を担ってきた砂魚少年のことを、多少なりとも好意的に見守ってきた物語の眼からすれば残念ながらここまでである。

　ああ、虚しきかな、動かせぬ事実とは――祝いの宴会で、『どこから見つけてきたんですか？』と無邪気に聞くことなど、カルツ・ピルスには必要なかったのだ。彼は、加環を宴会場にまで持ち込んで自慢している一人の男が、見慣れた鋏をその中心穴の、時計の針に見たてた位置に置いているのを目撃したのである。

　兵士達が互いに自慢しあう話を総合すると、どうやら彼らは滝から入ったのではなく、他の入り口から入ってあの滝から出てきたらしかった。有り余った筋肉のために、下手をすると大事な一期一会の友人をあの亀虫同様にしてしまいかねないほどの力で少年の背骨を振動させた大きな手からは、今や内側の青い体液が少し黒ずんではいたものの、鮮やかな赤みと白い揖保は損なわれていなかった。

「お、坊主、どうだ、ほしいだろう。だがやらないぞ、それは一番強かった魔物でな、最後までオジサンにくらいついてきやがった。腕の骨が折れちまったが、いやいや、司祭さん達を連れてきておいて良かったよ」

　砂魚者は鋏を撫でながら聞いた。「連中が襲ってきたんじゃないんですね」

「先手必勝さ。俺が奴らより先に、滝の中からあの邪悪な長い目に気づかなければ俺達が奇襲を受けていたに違いねぇ」と、別の男が言った。しかし、誰もが俺の活躍のおかげだとばかりにがやがやと喋りだした。

「何しろすげぇ敵の術だ」「おお、あれは何だっけ、暗黒術…法？」「ただの水鉄砲だと思うだろ、だが違う。一度に数人がなぎ倒されちまった」

『何が暗黒だ。…そうか、君たちは高圧水流砲の術が使えたんだね。河童神が水神の概念を取り入れて南国で信仰されているんだったな。あの大きな両方の鋏から撃ったんだろう、陽折牙の主砲みたいによほど強力な攻撃だったに違いない。もし本気で殺す気なら頭を吹き飛ばしていただろう』カルツ・ピルスは鋏から目をそらさずに耳だけを立てていた。

「まぁ安心しろ。今度加環をまた取りに行くときのために、しっかりと幼体にもとどめさしといたから」「俺も俺も！　何か周りのやつがギャースカ言いながら鋏を振り回していたな。あんな知恵のない奴らにも子とか親の概念があるンスかね」

「まさかだろ、あってもザリガニだって、別にあんなの」

「僕、この鋏もらっていきますね」突然、彼にとっては遺骨と呼ぶに相応しい大きな赤い手をもって少年が立ち上がり、もう立ち去りかけていた。「お、オイコラちょっと君」兵士が慌てて立ち上がって彼の肩を掴んだ。カルツはきっと振り返って相手の顔に丸く穴の開いている小さな石を投げつけてやった。

「それが御代ですよ。アンタ等、ゼニが必要なんでしょう、何にでもね。そいつも加環だ。本来、加環はそういうものだったのに、俺達が勝手に武器だと思い込んじまった。

邪悪な魔物だ？　…ア？　クソクラエだよお前ら！

頭のねぇドン臭いバカどものくせに、あれほどの知性と優しさを持った人たちを嬲り殺して勝ったつもりでいやがる。…おお、やるんか、クソの分際でこの俺を殺せるンか。クソにも多少は度胸があると見えるな」

酒も入っていたし、わけのわからない難癖で気分をぶち壊した砂魚の少年を、数人の兵士が剣を抜いて囲んだ。彼はそれを喜んで見上げた。『おお、いいぞ、さぁやれやれ。幸福の天使なんか消えてしまえ。あの人たちのところへ連れて行ってくれるのはあんたらしかいない。さぁ、存分にやってくれよ』

だが、彼の期待とは裏腹に、周囲のものが即座に割って入り、兵士達の武器を奪う。カルツは鋏を安全なテーブルの下に置くと、敵対した男ではなく抑えにかかった兵士に体当たりし、敵の戒めを解いた。そして、ふらつく大人に飛び上がって頬に拳を突き入れる。

「このガキ、ぶっ殺してやる」「上等だ、やってみろ！」

兵士が木製の椅子を掴んで彼に叩き下ろし、それはひどい音を立てて砕けた。砂魚の少年はとっさに腕でそれを防いだが、一瞬相手の位置がわからなくなった。と、もう大きな相手に掴まれていて、勢いよく床にねじ伏せられ数発目の辺りを腫れるほどに殴られた。だが、今までの人生において何を言われても抑圧し、一人で陰口をたたいていただけのこの少年が、あろうことか、全く勝ち目のない喧嘩を自分から仕掛け、劣勢になっても狂ったように足をばたつかせて喚き、口汚くののしった。

「何してやがる、俺の首を絞めろ。それとも武器を持たない鋏の連中に百人で向かったアンタ等には、そんな力もねぇのか！」大人たちは腹を立てながらも、少年が何に憤っているのかをわかりはじめ、殴るに殴れず彼を組み敷いたまま言葉もない。そこにゆっくりとした足取りで提督がやってきた。宴会に喧嘩くらいつき物、自分が出れば大事になってしまうと自重していたが、少年の友人達に止めるようせがまれていたし、もはや看過できる騒ぎではなくなっていたのである。

「この男と少年をそれぞれ別の独房に入れておけ！　水も与えろよ、頭を冷やすようにな」「そんなもん要るか。アンタ何もわかっちゃいないんだ。いつか必ず裁かれるぞ。いや、俺が裁いてや――」

「カルちゃん、カルちゃんやめて！」『死刑だ、お前ら全部死刑だ！』と叫びそうなところでミャンレが飛びつき、彼の口に手を押し当てた。『カルちゃん、わかるわ。アタシ達でやりましょ…』彼女はさっと離れると騒ぎにまぎれて鋏を抱きかかえ、宴会場を後にした。

　だが、彼には誰の理解も要らなかった。引き立てられそうになると、「独房は面白くて良く見に行ってたから位置ぐらいわかります。ガキじゃないんだ、手を離してください」といって自分からスタスタと牢獄に入ってしまった。そして膝を抱え、見るも哀れな様子で声も無く体を振るわせ始めた。

　――私達は、子供達に何を残せてきたのだろう。彼が小さな虫の死に感じたようなことを、私達は彼らに対して感じることができているだろうか。ああ、私達もまた子供のようなものだ。いつ、何かをわかったつもりになってしまったのだろうか――人知れず、神の中の神を名乗る眩いばかりに輝ける姿が宣する*――断ち切らねばならぬ。我が正義の下に。犠牲の剣をもってして――*

　すぐに釈放されたカルツは、本当に久しぶりで陽折牙を訪れた。といっても表からではなく、海中を泳いで船体を軽く叩き、爆弾投下口を開けてもらって侵入したのである。兵士達にとってはもともと、サパニ・キィフ・シュイラーダート以外の子供はお荷物だと思われていたのだから、喧嘩の一件ではっきりいうと彼は完全に嫌われてしまっており、普通に入れてもらうことは不可能であったのだ。砂魚の少年は部屋にいながらでもくしゃみや咳をするたびに『あいつ、頭おかしいんじゃねぇの』『キレやすい子供っておっかねぇよな』『ひ弱なくせにいきがりやがって』という噂話を聞いたように空想したが、それは確かに事実と大差ないのだった。

　警備がたった二人の兵士だけという薄さはサディンカプルが周囲の軍を甘く見ていることの現われであったが、そのおかげで少年は助かったと思った。

「元気だったかい、ちょっと話でもしようかと思ってきた」

*『いつも通りに、ですね』*機械の発言は、もはや人のそれと大して変わらなくなり始めていた。カルツの空想的翻訳が慣れによってそうさせたのかもしれないが、もしかしたら陽折牙の空虚な精神そのものが、少年の有機的精神磁場を取り込みつつその脳波の動きを学習しているのかもしれない。

　そして機械の言うように、彼らの友情が冷えて会わなかったというよりも、いつでも遠隔で会話ができるので、それほど焦ることもなかったという感じである。だが、念手紙念手紙装置を通して、遠方の相手とメッセージを書いた紙をやりとりする。高価だが、稀に全く違う言葉に化けたりするので、商業用や外交用には向かないで連絡しあえる間柄でも、実際に会わないとなかなか想いは伝わらないものだ。この年にして世界で唯一大事だと思った人々を喪失した少年は、どんよりとして、それでいてどこか精妙で澄んだ眼差しを中央の台座に向けた。

「俺ね、キィフに告白しようと思うんだが、君はどう思う」

*『百害あって一利なし、と思案されます、ご主君』*答えを、機械的な口調に敢えて戻したようだった。それはカルツ自身の深層心理が識っていることを暴き出したにすぎないが、陽折牙なりの思いやりであった。もちろん、カルツ・ピルスの自我もそれをよく知っていた。

「駄目だな、君は、そんなことじゃ。あきらめるのは駄目なことなんだぜ」彼は笑って席に着いた。暖かな日差が塔楼の大きな窓から挿していた。ぽかぽかするので、何だか眠くなってくる。「おやすみ陽折牙」

　彼がふと目覚めると、外に雪が積もっていた。これが夏雪かぁ、と彼は窓を蹴破って飛び出し、雪の中から土を露出させて見え隠れする線路の上空をふわふわと浮き上がりながら、十年前に亡くなった近所の猫の赤ちゃんを探していた。「あのコ、どこに埋もれているんだろ」

『ここよ、ここ』と、崖の角の吹き溜まりからミャーミャーと泣き声がする。彼はその子を助け出し、胸に抱き寄せ、何度もキスをしてやった。暖かく柔らかい感触が寒さの痛みを打ち消してくれる。「よかったねぇ、お前、本当によかったねぇ」『マダマダよ』

　赤子にそういわれ、カルツは雪の中から次々と毛玉のような様々な色の連中を掻き出していく。ちょうど七色ほどもあるようだった。だから最初の子が、『虹の会議を行います』と愛らしく宣したときも、彼は全く違和感を思えず、しきりと頷いた。とたんに、ミャーミャーミャーミャーミャーと一斉に愛らしい議論が始まった。『はい静粛ニャ』議長のような子はカルツを見上げた。

『…あなたは、よくがんばりました。因って、

死刑ニャ』

*『ご主君』*魘されていた彼を、陽折牙が呼びかけて起こしてやった。*『方々が本艦に接近中です。ご主君を探している模様』*しかし少年はしばらく寝ぼけて、あの積雪がいくらなんでもこんなに早く溶けるなんて熱帯気候とはすごいものだ、と考えていた。

「やっぱりここだった」どうやって入ったのかは想像がつくけどね、と思いながら星の少女が台座に伸び上がって、肘から下を台座に置いて指同士を絡み合わせた。「出撃ですってよ、艦長殿。南部の星族を攻めるんだって。…チャンスよ、これは。例のモノも持ってきたわ」彼女は、小さな麻袋を持ち上げて見せた。だが、カルツは嫌な顔をしてそれから目を背けた。

「キィフは、どうしたの」

「キィフ？　どうでもいいじゃないのよ、何で…」

「旗艦から飛ぶんだって。俺達は先陣を切らされるんだ。ざけてるよ、マジで」ワナが台座を軽く蹴ったので、カルツは『お前の方がむかつく』と思ったが、言わなかった。

「じゃあ、行くか」砂魚者は石を握って頭上を見上げた。それだけで陽折牙の、と同じ力を内在する二本のマストがぴんと張りつめて色を失い、光を透過するようになる。今まで散々仲良くやってきたくせに、加環で戦力が上になったと見るやすぐさま裏切って侵攻を開始する勢力について、彼は全く省みていない。ただ単に、慧栖架の母艦は彼女に風を教えた自分しかいないのだから、取り返しに行かなければならぬと感じていたのみである。

「三時間後だってよ、カルちゃん！」他の二人が同時に叫んだが、彼は止まらなかった。「同じだ、出てきた奴は皆殺しにすりゃいいんだろ。ガキでもできるぜ」あの卑怯な連中のことだ、どうせ勝算あっての作戦、少しくらい肝を冷やすくらいがちょうどいいんだ、と彼は思っていた。実際、見張りが慌てふためいて提督に報告し、司令部も無線で戻るように打ったが陽折牙が聞き入れないので、作戦の決行を早めるためにあたふたと動き出した。――機械を通さず、光の瞬きや術の念話で相手が連絡してきた。

『サディンカプル王国国境防衛軍の戦艦へ・本空域は沈星帝国領空である・転回し帰港せよ』

「自分達が死ぬってことをいち早く教えてやれ、陽折牙」

　カルツの命令によって、二十四本の牙がぐるぐると廻って白いエナギーの渦を円盤上に発生させた。次の瞬間にはもう、その通信を送ってきた斥候の敵船は、至近からの衝撃で綺麗に皮膚だけを残した焼き魚のようになっていた。「ヴェシュマ発進。マグネーティッシェヴェレも。ヴィルベルは一機だけ残れ。雲圧気注入、」彼は目を据わらせて前方を見定め、『艦長』と呼ばれたからでもあるまいが、淡々と戦いを進めた。

　雲の波を掻き分けて陽折牙は周囲からの梵子カルヴァリン砲を器用に避けていたが、ようやく主軍の大艦隊が到着、かつて敵としつつ実質は味方だった勢力に襲い掛かり、ようやく星勢力に対抗しうる武装を施したヴェシュマ達を放ち始めた。それを見て、カルツの船は海中のような雲から白い気煙を噴出して這い出し、後方に下がり始めた。同じく出番を失った慧栖架が、何もせずにふわふわと飛んできて、陽折牙に係留した。

「おかえりキィフ」幼少に義父の手で失われた実父のような響きを有するカルツ・ピルスの声に、彼女はどきりと足を止め、思わず顔を赤くした。「あ、はい。あの、ありがと、ね」

「ひでぇもんだ…　これが、俺たちの軍隊かよ」ワナが思わず呻いた。彼らの船が放映する画面に頼るまでもなく、窓から肉眼で一方的な奇襲作戦を見ることができる。自分達の部族など消えてしまえと思っていた元皇女も、さすがに辛そうな表情で首を振った。『天の神よ、御身の永遠なる極楽に彼らの魂を受け入れたまえ…』

　だが、カルツ少年がもし本当に『神官』としての才覚を持っていると仮定するとしたら、その証明としてこれ以上ないほどの事態が発生した。*いつか必ず裁かれるぞ――*それは、決して遠い話ではなかったらしい。

*『未確認艦隊急速接近…　戦艦コード認証…　確認完了、帝都の護衛艦隊です』*船室内の明かりが暗くなり、画面が大きく左右に分かれた。さらに警告音が鳴り響き続ける。

*『緊急事態発生。後方6-2-4空域外、前方3-3-8同じく空域外より重力圧吸引機の作動を多数検知。その数合わせて85。浮上まであと二分』*

『こちらパムタヤー親衛第八、九飛翔連隊・援護する』こういった通信が、あからさまに敵である地上側にも聞こえるようにはっきりと入ってきた。そして、左舷側から圧倒的な火力と連射でガレー船が次々と打ち抜かれていく爆音が付近一帯を轟かせていく。その砲撃は下がっていた子供達の船にも届き、艦体を揺らした。陽折牙はグーンと航跡を素早くカーブさせて砲撃をかわし、敵の死角となる斜め方向に入って火矢を連射、新型海牛一隻を炎上させた。これならまだがんばり次第では互角というところだが、周囲の雲から次々と旧型海牛が湧き上がってきて、立ち往生しているサディンカプル艦隊のガレー船に接舷した。

「地上の帝国が、空の帝国と結んで身内のものを討つなんて」サパニ・キィフ・シュイラーダートは、第二の故郷となりつつあった王国の軍勢が殲滅されていく光景を見ていられず、出て行こうとする。ワナ・クヴァイが賢明にもそれを止めた。「君でも、もう無理だ！　カルちゃん、船を走らせろ。これも戦場の常、自業自得だ」

「いや、ワナ君、離して！　皆は先に行って、後で追いかけるから」とキィフが涙を流しても、飛竜者の少年は心を鬼にして彼女の腕を強く掴んだままにし、「早く！」と中央の台座に向けて叫んだ。傍らのミャンレも、『カルちゃん、あんな奴ら、関係ないよね？』と伺うようにしながら、彼の服の裾をちょいちょいと引っ張る。

　だが、サディンカプル軍に強い憎しみを抱いていたはずのカルツなのに、そんなことも麻袋の中身のこともすっかり忘れてしまって、黙ってキィフだけを見下ろしていた。『君のために、僕はまだ何かできるのか。まだ、僕は…』

　砂魚の少年は素早く台座に目をやると、念で機械に話しかけた。それに対する答えは、こうであった。

*『現時点では退避が推奨されます…　ですが』*陽折牙は、暫く黙った。そして、あろうことか自分の中にコーディングされていた禁を破るパスコードを自力で探しだし、打ち明けたのだった。*『本艦には秘匿プログラム攻撃が搭載されています。ただし、これは手動のみ発動できます。もし手順を間違うと大変危険であり、推奨できません』*

「ありがとう、それをやる」彼は銃座の下にあるパネルを開き、指示された通りにいくつかのスイッチを押した。と、艦内にいつもとは違う、一番最初にワナとカルツが聞いたような無機質的な音声が響き渡った。

*『非常用手動モード起動。戦闘支援思考システムダウン…』*

*『ご武運を、ご主君』*機械が一時の眠りに着く前、こういった声も僅かながらカルツだけに聞こえた。少年は手法の銃座を握り、念を集中させ、船から教えてもらった沈星言語による術語をゆっくり呟いた。彼は、それを得意の心術の助けを借りて暗記していた。『マルセス、ミュフ、ヨスロ、アウロフ、ヒフリー、ウ・ルス、カンヌマ、グエテ…』

『え、え？　何でこの人が彗星空域を飛び交う浮島のこと。速いものはしばしば船を撃ち落してしまうので恐れられているの名前をこんなに知ってるの』地上の学校ってそんなことまで細かく教えるのかしら、侮れないわ、とどうでもいいことにミャンレが感心している間、主砲の充填計器はぐんぐんと上昇して十割になり、再び零を指した。だが、その色が赤から青に変わっており、見る間に再び、しかし今度はじりじりと上がっていく。「114％…？　カルちゃんどうしよう、機械おかしいよ！」

そのとき、被弾して船が激震した。

「カルツ！」久しぶりにワナが級友を呼び捨てにした。だが、彼に掴まれている娘はその隙にさっと身を放した。しかし外に出ず、興味を通り越してすがるような目になって、砂魚の少年を震えながら見上げた。「何か…、してるのね。お願い、早く撃って。信じてるわ、いつもカルツ君は私を助けてくれるんだもの…」

　ミャンレが思わず裾を引っ張る指をぎゅっとつねるようにした。『アタシのカルツにまで手を出すつもり？　いくらアンタでもそんなこと許さないわよ…』

だが、少年は当然ながらニタリと満足の笑みを浮かべていた。その笑みは、――ああ、哀しくも、いつもの彼のそれではなかった。傲慢で、快楽と幸福を当然享受する権利だとか勘違いしている人々のそれと、彼が生まれながらにして本能的に命をかけてでも相対してきた勢力のそれと、何ら代わりが無いものだったのである。

「こちら陽折牙・栄光ある王国の全防衛軍へ・本艦は敵の一挙殲滅作戦を発動中・本艦を護衛されたし」カルツはこのように打電すると、ミャンレに熱っぽく、うわ言のように囁いた。

「君は船を味方の中央に入れて。時間を稼ぎたい」

『あっ、嫌、カルちゃんじゃない、こんなの』そう思いつつも彼女は取り憑かれたようにふらふらと座席上昇スイッチを押し、操作盤をわかる範囲で動かした。

　サディンカプル軍が、子供の戯言であろうとも藁にもすがる思いでその周囲を囲み、敵がさらに大きく外周を形成した。こうして、映像の消えてしまった全天候モニターの必要も無く、あらゆる窓から味方の船が沈んだり、兵士達が殺されていったり、それでも加環を握ったヴェシュマだけが元気よく敵と切り結んでいる様子が見えた。これも、帝都の護衛艦隊から出撃してきたヴェシュマとぶつかり、だんだんに減っていくのだった。

　長い時間がさらに長く感じられ、計器がもう一回りして250を超えた。すでに味方は半分以上が沈んでいる。敵の被害もさすがに甚大であるが、決着の行方はもはや濃厚であった。

「どうしたの、途中でもいいから。早くしないとみんな殺されちゃう！」

　キィフは気が違ったような勢いで、カルツの後ろからその肩を揺すぶった。だが彼はそれを心地よい肩揉みくらいに感じながら、冷徹に首をゆっくりと横に振った。「今じゃ敵を完全に消せない」彼は左手を自分の肩の上に置いてさらりと撫で、ひんやりとした雪聖種族の肌を愉しんだ。

　しかし彼女はおぞましい気がしてぱっと離れ、振り返りもせずに手をさすっている少年の頭部を睨むようにした。しかし、ふと別の視線に気づき、前方斜め上を見やる。そのとき初めて、ミャンレ・フリスロッツの暗く淀んだ眼差しを雪娘は自分の眼で受け止めることになった。星の娘も驚いたが、しかし、もはや逃げることもないとそのまま睨み付ける。

『何なのミャンレ、　…そう、そういうことだったの。

友達…　ね、はは、私ばっかり馬鹿みたいに』キィフもまた、自身の純粋な心に皹が入っていく音を聴いても、それが何なのか自分ではわかるはずもないのであった。『アンタみたいな狂った女が、カルツ君を、いえ、義父みたいなのを造っていくんだわ』彼女はじっと元皇女を見据え、次に『アホくさ』と思って、ふいと眼をそらした。ミャンレは『勝ちィ』と笑ってカルツに視線を移す。

「よし、MAX300。発射だ」教えられたことに忠実に、カルツ・ピルスが台座の角度を手動レバーで上空に向け、引き金を引いた。

　台座には、毎度期待されるような瞬間的な変化は起こらず、数秒経ってようやく青白いエナギーの塊がチューブから搾り出されるようにぐるぐるとバネのような形にうねりながら天高く昇っていく。それを唖然と見上げたキィフは、窓からでは途中までしか見えなかったので、視界を別の方面へ向けた。そちらでは、愛する乙女が新鋭飛空挺に移ったのは悲しかったがそれも不幸中の幸いかと艦長が思ったかはわからないものの、旗艦バーパブルが爆発炎上しながらゆっくりと巨大な船体を雲の中に傾けていく。これで味方は最後のようだったから、回避できない陽折牙はただその分厚い装甲と梵子砲霧散能力を頼りに、周囲の敵が接舷してくるのを待つようにみえた。

　――ヅィュン、と胸を貫くような巨大で低く濁った音がして、上空から複数の何かが落ちていったようだとワナ・クヴァイが思った。途端に艦内でキュラキュラと機械音を立てながら部屋の壁全体がぼんやりと光を取り戻し、戦況を映すモニターが復活した。

*『戦果報告。艦数74を分裂荷梵子砲により爆撃、敵戦力の97％を一括消去』*機械的な放送を裏付けるように、画面がいくつにも小さく、さらに小さく分割し、上空から瞬間的に打ち抜かれたアルタクシャス、ビヒルエイス、パムタエの軍勢を反映した。

「よくやってくれた、ご苦労」カルツはああ疲れた、とばかりに満面の笑みを称えて背後の少女を振り返ったが、彼女は右眼を大きくして彼を睨み付けるようにしていただけである。もはや罪悪感すら消えうせ、キィフは左目で読心術を試みる。その能力は少年のそれをはるかに上回っているため、被術者には防ぎようが全くない。

「私を…？　そう。…笑わせないでよね」引きつった小さな笑いを残し、彼女はふいと外へ歩いていく。少年はこの時ようやく、自分が何か大変な、あの兵士達のような取り返しのつかないことをしでかしたのではなかろうかと思いつき、愕然とした。人に説教しておいて調子に乗って、自分が一番悪いといった間抜けな男を、僕は演じてしまったのではないか。

「待って、キィフ！　俺、敵が許せなかった。君の味方を、助けたかった！」彼は涙を浮かべて叫んだ。だが、彼女はもはや振り返りもしなかった。

「そうでしょうね。いずれの理由も、あなたの利益になるもの」

　飛び出していった雪の娘をワナが追いかけていく。カルツ・ピルスは震えだし、さめざめと泣き始めた。陽折牙が、まだこの機械にはわからない機微による精神的な痛みを慰めようとしているのか、華々しい戦果を何度もリプレイで室内に流している。それを見上げながら場違いなほどに明るい声でミャンレ・フリスロッツが彼の元へ歩いていった。「ねぇ見てカルちゃん、陽折牙の頭脳が機能麻痺していたのは、破壊エナギーの一本一本に直接狙撃誘導と出力分散命令を『入力』するためだったのよ」

その映像によれば、ゆっくりと打ち上がった超高圧縮の純粋破壊力が３幹度ほどで再び球形に収束、人口太陽のごとき凄まじい輝きを発した後、破裂してその光の束から解れた幾重もの筋が一瞬にして寸分たがわずあらゆる敵を打ち砕いたようであった。「機械の梵子術よ。凄くない？」もうカルツはアタシのものだ、と余裕の表情で彼女は彼の頬に自分のを当てる。

　しかし彼は涙をぐっと袖で拭うと、乱暴に向き直って彼女の両腕を掴んだ。

「君さぁ…　何なんだよ。俺のこと好きなの？」

「あ、う、だ…　大嫌いよ、何で、アタシがアンタなんか…」

「だったらさ。もう放っておいてよ。辛いだけだ」彼は台座の上に頭を抱えた。ミャンレは唇を青ざめさせて震わせたが、その背の上に身を寄せて屈みこんだ。

「アタシ…　だって、ママがアタシのこと好きで、アタシは仕様が無く付き合ってあげるっていう風にしたいんだもん。そう決めたんだから」

『ママ？』少年はわけのわからない国の言葉を聴いたような感覚で、しかしそれを指摘せずに再び勢いよく座椅子を回転させたので、彼女は支えを失って彼の膝元に崩れ落ちる格好となった。『コイツ生意気』と感じたミャンレは彼の腿に左腕をやって上半身を起こし、少年の唇を奪った。そのせいでカルツは一瞬、恍惚感を伴う呼吸停止で自分が死んだように感じた。

「男と女は遺伝的に少し異なるだけ、だから、女としてじゃなくて。私は人間としてどう、好き？」と彼女は額に若干の汗を浮かべて聞いた――怖い。このコのことがわからなくて怖いけど、止められない――

「ああそうだ、だから何したっていいだろ！」キスじゃ足りない、と彼は思って腕を彼女の開いた胸元からぐいと差込み、ずっとどんな感触なのかと空想していたものを荒々しく掴んだ。

「…ふふ、いいわ。カルちゃんならいい」その寂しそうな笑顔を見て、再び慄いたようにカルツ・ピルスは右腕をゆっくり引き抜き、それを別の腕で力強く押さえつけた。

『僕の中に何かいる…　悪魔…

いや違う。僕は、せめてあの連中のようには最後の最後まで間違いたくはない。それは僕なんだ。僕が…　全て僕の仕業だ。僕の罪だ』

彼は眼を閉じて前に向き直り、告げた。「俺、キィフのことがまだ好きだ」

「…でも、あのコはママのこと嫌いよ」ミャンレ・フリスロッツは何かを悟り、涙をぽろぽろさせながら眼と繭の間の皴を小刻みに震わせ、唇を噛んだ。

「それでも、あきらめきれないんだ。君は頭が良い。船を下りて幸せに暮らせ、地上は誰でも受け入れるさ。僕は王国軍の兵士に志願して、一から出直す。

太黒熱の真珠、きっと綺麗だったろうね。…君の願いをかなえてやれなくてごめん」

「そんなモンもうどうだっていいわよ…」力なく俯きながら星の少女が台座を降り、外の出口へ向かっていく。またも鼻水と涙でぐじゅぐじゅの顔だったが、彼はそれを優しく、これより愛らしく薄曇った真珠のごときものは世界に存在しないだろうと思って見送った。外では、傷つきながらも頑強に生き抜いていたヴェシュマ数機を、黒いエッセンシュトライヒェンや慧栖架が主導して集め、敵の残存兵力を清掃していた。少女はそれらの光景にも全く注意を払わず、鳥型の機体を発進させて何処へともなく降下していった。

――しかし――許してくれ。私こそは罪深いのだ、カルツ・ピルス。

君の迷走が描き出す、光沢しゆく沈鬱によって彩られたその筋を利用するこの私――

恐れ多きことよ、ああ神よ慈しみたまえ、あなたの、あなただけの忠実なるこの従者を――私は、あなたの罪を、告発しようというのです――

　少年は失敗を乗り越え、心を破損させ、修復させて少しずつ強く太らせ、成長していく。どこかが歪に節くれだったり不具合を起こした部分がやたらと主要な部位よりも増長したりすることがあるかもしれないけれども、まずはそうやって大人になりつつ、社会の中に埋没する技術を得ていくものだ。しかし、カルツ・ピルスが社会より受け継いだものではなくて自分の体験から独創的に導き出したもの、すなわち良心、勇気、責任、そして罪などといった概念は、彼を決して運命の特殊性から解放してやりはしなかった。

　彼はそれから一月もしないうちに、再びミャンレ・フリスロッツやワナ・クヴァイと、もう一度空へ飛び立つことになる。その理由を説明するには、こうして時を飛び越してしまわずに、とある無残な失態劇を描写してやる必要がある。

　逆説的に、嫌いな職場に就くことで自分を鍛え、あわよくばキィフの国を守ってもう一度省みてもらえればと思ったカルツであるが、喧嘩が強いわけでもないし、何か特技があるわけでもない彼を、しかもその関係も良好とはいえない、いや、最悪の状態にしてしまったばかりなのに、誰が雇ってくれるものか、と彼自身思った。受付の兵士も同じ考えで、俯いて眼を背ける少年を嘲るように見下しながら、まぁ一応上官に伝えてくる、とだけ言い残した。

　だが、その上官が、さらに上層から、そいつもさらなるお上から言われていたことは、『今回の勝利をもたらした陽折牙の少年を、ぜひ我が軍部に取り込め』というお達しであったから、この兵士は覚えきれないほどに色々な指示を散々に受け、ふらふらと彼の前に来ると、きりりと顔を引き締めた。この男は確か、こんな風に言っただろうか。「カルツ・ピルス殿、貴君を特殊遊撃部隊長として、国境防衛軍対空部隊にお迎えいたします。この私めがお世話役として提督から直々に仰せつかりましたゆえ、何なりとお申し付けください」

　少年は作業服に代えて、今度は新調された黄土色の立派な軍服をもらって、鏡の前で何度もポーズを決めてみた。「うむ、苦しゅうない」と彼ははにかんで自分に言い聞かせた。

　四日後、早速に彼は『隊長』と呼ばれ、艦橋に入った。乗り込もうとする兵士達を彼は断り、『あの爆撃をするには特別な集中が必要で、人が乗っていると不味いんです』と嘯いた。そう、何のことはない、必要とされているのは彼ではなく敵を全滅させたあのどんな高位術者でも恐れるような、世界最強の攻撃力だったのである。彼も十分にそれを感じていたが、これはキィフに近づけるほどに自分の株を上げる、最初で最後のチャンスだと思われていたから、逃げなかった。

サディンカプルの軍勢は船をまだ多く地上に残していたし、辛うじて制圧した南方空域の沈星部族を併合して軍事力を吸収していた。一方、ビヒルエイス共和国はサディンカプル手強しとみるや再び手のひらを返して閉じこもり、『自分達は盟主国の指示で仕方なくやった』という態度に出る。この機会に起死回生の全てを賭けていたその指示先と精鋭を差し向けた沈星の二大帝国軍が一番大きな被害を被って多くの飛空挺を失っていたから、アルシュマイナー・ローテンハイツはこの機を逃さず、連合を裏切ったアルタクシャスへの報復、と銘打って自分たちが星者にでもなったかのようなやり方で爆撃作戦を始めたのである。これでいよいよ、冷戦的に争っていた二国に決着がつくものと思われた。

それにカルツは陽折牙と何度もリハーサルをやったし、二度目のことだったし、何より敵がそれほど多くなかったので、間違うはずはないと思っていた。だから、自分がやってしまったことについて我が目を疑い、これはきっと悪い夢だと、月並みな逃避的発想を繰り返した。

しかし彼のためにもはや無意味ではあるが若干の弁護を試みるなら――空域中の戦艦を狙い打つことと、地上の打ち上げ機に着いた船を超遠距離から一度に撃つことは全然違う難易度というものである。これを成功させれば俺は誰をも恐れることはない、とまたも子供っぽい発想で大人びた利権欲に駆られた砂魚の少年であるが、彼の提案を容易に承認したサディンカプル軍上層部の判断もどうか、というところである。

彼は功を焦り、二つの大きなポカミスをやってのけた。まず、あれほど練習したのに死の危険がないと本番に弱くなってしまうのか、射出角度を変えず、いつもの25度で射撃してしまったこと。これで全然見当外れの方向へ破壊エナギーの塊がまっすぐ飛んでいき、前を護るように推進していた、新しく旗艦として任命された小型のフエト号の船腹に、その初陣で早速と風穴を開けてしまった。

また、陽折牙の思考プログラムはダウンしていたから、彼自身が狙う距離と座標をしっかり指示しなくてはならない。ところが前回、たまたま味方がいなかったので狙う必要もなく、全部墜とせ、とやったわけだが、眼前の台座上に、マークされた目標を示す詳細な地図があったにもかかわらず、何と今回も同じような命令を下してしまったのである。結果、全く恐るべきことだが、数秒後に射抜かれたのは周囲を飛ぶ味方の艦隊だったというわけだ。

そうでなくても人工知能が直接狙っているわけではないのだから、その様子を見る限り十中八九、地上を弾道爆撃するほどの精度も威力も、この特殊砲撃にはなかっただろう。不幸中の幸いであるが、彼が一度目のミスで角度を違えていたためにさらに狙いが大きく反れ、多数の攻撃が味方の船すれすれで雲を抜けて飛んで行き、全滅は免れた。

相手が弱っていたのでそれでも何とか戦闘が継続され、それなりの戦果を収めて帰ったが、アルタクシャスとしては運良く息をつないだことになる。そして現在爆撃能力を積んでいない陽折牙は何の役にも立たず、味方の冷たい視線を浴びながら空域を漂っているだけだった。わざとやったわけではない、機械のことである、というわけで彼はなんとか罰せられることだけは避けたが、もはや隊にいられず、早速と退職届を出して当たり前に受理された。

この失敗は当然のごとくに彼の無能さを表すものかもしれないが、――それだけで片付けるにはどこか違和感を感じはしまいか。彼はまるで、失敗する隠密作戦を『成功』させたかのように、狼狽しながらも心のどこかでは冷めた眼差しで現実を受け入れていたのである。

もちろん、宝船は置いていかざるを得ない。彼は、自分が作戦の失敗を言い逃れるために人工知能のプログラムミスなどを挙げたことを恥じ、最後の挨拶もできずに国を後にすることにした。自分のせいであの優秀な軍艦は危険視され、今後日の目を見ることはないかもしれないのだ。だが、彼は戻って『自分が悪かったんです』と白状する勇気というか、気力そのものがすっかり萎えていた。彼の目の前にあるのはもはや、どうやって自分という役立たずの個体を処分するかということだけであった。カルツ・ピルスは、あの濁った滝壺の中に自分の骨と鋏を一緒に寝かせるのも悪くないと考え、ふと麻袋を、そしてミャンレ・フリスロッツを懐かしく思い出した。

『もう一回だけ、君に会えたらなぁ。…しかし何とまた自分勝手なことを考えるんだろう僕は。君はもう、ビーチボーイとでも一緒にのんびり戯れているんだろうから』

　街の石段を上がり、郊外の馬車乗り場を目指した。少年は、いつか機械や道具達が彼に調子はずれの音程で聞かせてやったように、滅茶苦茶な鼻歌を作って我知らず口ずさんでいた。

*階段登りで感じる　慢性的な体の重さ*

*こんな重力の中でどうして歩けるのか*

*どうして細胞の結合を維持できるのか*

*どうしてその分裂と処理を持続できるのか*

*どうやって心臓や肺、腸のみならず肝臓まで稼動できるのか*

*費やさなければならないと　押し付けられる若さが憎たらしい*

*僕はやらない人間とは違う*

*下手なりにもう十分失敗した　…もうよかろうさ*

「ふーん、文才だか本の虫だかで、しかも詩歌の嗜みもおありなの。変な歌！」と、悪態が彼の心を優しくくすぐったような気がした。彼は、あの神秘的な、いやその実は全く普通の、ちょっと可愛そうなところもあるけれど、それでも色々とバカな部分を持っていて、その一つ一つが彼女の魂そのものを他から切り分けて認識させる個別信号なのだと感じたあの娘が、傍にいるかのように斜め右下を優しく眺めた。そこには、ミャンレ・フリスロッツが腰に手を当てて彼を神妙な顔で見上げている。…気がした――気が…　いや、幻影と思われたものは、消えようとせずに近づいてくる。彼は驚愕して手荷物をその場に落とした。

「何、せっかくついて来てやったのに、カルちゃんはどうしてちゃんと歓迎してくれないわけ」まだキィフとか言うの、別にもういいけどさ、と頬を膨らませ、いつもの皴を披露する。

「あ、…ねぇ、あの鋏、まだ持ってる？」彼は泣きそうな顔を隠そうとして、全く聞きたくないようなことを話題にした。

「す、捨てたに決まってんでしょ、臭いんだから」彼女はちょっと狼狽して、片目を閉じ気味にした。少年は、おかげでまた少し延命できたのかな、と無言で思った。

「何よ。怒ってるんでしょ。アタシだってもうその何倍も怒ってる。

こんなに可愛いミーちゃんを厚紙の箱で川に流しといて、謝罪の言葉もないわけ？　バカじゃないの、アンタってホント。ニィーニィー泣いてたんだよ、子猫みたいに。サミスィーサミスィーとも泣いてたよ。…嫌いだっていいんだもん、ついていくんだもんママに…」

ミャンレは眼に涙をいっぱい貯めてよろよろと石段を上がり、少年の胸にしがみついて嗚咽し始めた。彼は抱きしめてやることもできずに固まったまま、「今までどこにいたんだよ…」と聞いた。

「うっうっ…　兵舎の近くで…　ウェイトレスやってた。けっこう楽しかったよ。カルちゃんの噂も聞けたし」

なんだ、ドッペルゲンガー自分と同じ姿の霊で、見ると死ぬといわれる。クナウザスではいわゆる『ストーカー』の意味にも用いられるじゃあるまいし、と彼は少し気味悪く思ったが、とにかく感謝と強い愛着と、もう一つ、それに対抗するように湧き出てくる奇妙な拒絶心理を感じていた。

*『キィフへの愛はどうした。キィィフのことはどぉしたぁあ！』*それは、このように何かの魔物の叫びのように彼の中で木霊した。だから彼は荷物を拾い上げ、自分の感情に逆らって彼女に背を向けた。

「知ってるなら説明するまでもないんだろ。俺はもう駄目になった。あっという間だったけどさ。また仕事を探しにいく」

「場所を変えればうまくいくと思ってる！」彼女は芯を突いた指摘をした。カルツは心の中で『全くその通り、俺の弱腰には付ける薬もない』と思った。

「別に、社会でイキなくったって、野山に木の実も兎もあるさ」

「ミーちゃんも行く！」子供帰りしたような高音域のかすれ声で、星の娘が砂魚者の腕にしがみついた。「星座見るの得意だし。二匹だけでずっと暮らそ！」

　少年の拒絶感が彼女の強引過ぎる干渉でその固さを崩されていく。「二匹って何だ、僕ら野生になっちまうの？」

「うん、動物みたいにね、ずっと愛し合うの」彼女は涙をまだボロボロ遠慮なくカルツの腕に流しながら、うっとりとして宣言した。「そしてねそしてね、うーと、機械の犬も一匹お庭に飼うの。子供は二人かな。パパーって、来るんだよ、カルちゃんトコに」

なんだそりゃ、どっかのくだらない本にでも書いてそうなことじゃないか、星じゃそんなのが読まれてるのか、と彼は思ったが、彼女の情報源は、地上に興味を持つがゆえに全てその社会由来、彼の世界のそれであった。

「ねぇ、その家って俺が作るんだ？　木こりみたいに」「そうよ、あったり前じゃないの。アタシはずっと寝転がって旦那様の帰りを待ってるわ。滝のシャワーでも浴びてね」カルツは滝という単語で心をぐさりとやられたが、すぐにその意味を理解して胸を変に高鳴らせた。それを彼はなぜか自分自身に誤魔化さねばならないと思いつき、実行すべく楽しい妄想的話題を逸らした。

「…君の真珠は、もう要らないの？」

「ん、ん？　んー」変化球に対処しきれず、ミャンレが悩んだ。「だって、カルちゃんの船はもう無いんでしょ。アタシ、それでも別にいいもん」誰かさんと違って掛け値なしの愛よ、と彼女は思った。

「いや、必要なかったから俺、試してないことがあるんだけどね」

星の少女が顔色を変えた。「遠隔…？」

「俺、あいつを裏切ってしまったから。でも、もしあいつが許してくれて、もう一度やり直してくれるって言うんなら、また旅をしてもいいかな、って」

「…試してみなさいな。友情って、そんなに脆いものじゃなくてよ」事情も彼の言葉の意味もよくわからなかったが、咄嗟に彼女が応じた。その声色が変わり、眼差しが暗い海の色を取り戻している。

『――陽折牙、俺…　すまなかった。お前を売るような…』

*『ご主君、おやめください、そんなことが何だというのです。ようやくお呼びいただけたんですね。ひたすら、あなたのお言葉をお待ちしておりました。本艦は、幸福です』*

即座に、遠くの波止場で大騒ぎが起きたようだった。ちょうど新鋭軍艦の内部を調査するために科学者達が入り込んで色々と装置を弄繰り回していたことに腹を立てていたらしく、いつもの紳士的に感じられる陽折牙らしからぬ放送が、けたたましい警告音の連続とともに発せられたのが二人のところでも聞こえた。

*『艦長の許しなく本艦を汚す者達へ強く勧告する。即時本艦内部より離艦せよ。これより本艦を係留するあらゆる束縛を断絶させる』*

陽折牙の付近だけ地震が起きているかのように船がぐらぐらとゆれ、中の者はとにかく恐れて這い出してきた。船はそれを待たずにもう浮き上がり始め、遅れたものが傾いた甲板から地へ投げ出されて悲鳴を上げる。そしてアンカーを勢いで引きちぎったり、切れないものはバリスタを器用に打ち付けて断ち切った。

たちまち、小さく海に漂っていた船影が大きく、大きくなり、彼らを影の中に包んでいた。少女と少年は微笑みあい、はしごを掴んでスルスルと引き上げられた。

*『これより、他の方々をお呼びいたします』*

「あ、…もういいんだ。僕たちだけで行こう」

「カルツー！」そのとき下から、聞きなれた声がか細く聞こえてきた。

「…ワナ!?　…ごめん、俺、船をもらっていくよ。軍部の人には迷惑をかけました。むかつくなら追ってきてもかまわないけど、俺もぶつかってくる相手とは自分なりに戦うから、そう伝えてくれ。君は、提督に負けるなよ！」

「ざっけんな、おめぇ、いっつも身勝手なんだよ、俺を置いてく気か！」飛竜者の少年が拳を振り上げて飛び上がり、あと少しで上空の梯子を掴めるかというところで力尽き、ふらりと滑空し始めた。「君と俺の関係ってそんなもんかよ、陽折牙はよくて、俺は駄目なのか。だよなぁ、隊長になった途端に全然会わなくなるしよ、最低だよお前なんか、ちくしょう」

「ち、違う、ワナ」また誤解が仲間を失わせる――彼は絶望しながらも甲板の手すりに取り付いてあらん限りの声で叫んだ。「俺、君がキィフと…　それで、俺なんかもう会いたくないだろうと思って、それで遠慮してた！」

「バッケロウ、お前な、今まで俺はずっとお前のことばっかり心配してだな…　うわっ」上を見上げながら変な姿勢で飛んでいたので、ワナ・クヴァイがバランスを失い、急降下し始めた。しかし陽折牙は抜け目ない。すでに予測降下ポイントをはじき出しており、そこに梯子をうまく落としていた。彼は掴んでひょいひょいと上り始め、甲板に着くとゼイゼイ息を吐いた。「ったく、俺の力無しでサディンカプルとか沈星と戦えンのか、君は」

「ああ、無理だ無理だ、絶対無理。俺、どうかしてた」カルツはもはや涙を隠さず、級友の爪の長い手を両手で強く握り締めた。ワナも涙して「バッカだぁ俺たち。泣いてら。恥ずかしいったらねぇぜ」と笑った。

「ホント、友情ごっこはもうこりごりよ。これで以後は勘弁してね」とミャンレ・フリスロッツが二人の肩を抱いて引き寄せた。「しゃあない、喧嘩することないわ、二人ともアタシが面倒見てあげるからさ」もうその目は普通の、星々の輝きになっている。

「え、面倒…？」とワナが呟いて、途端に顔を赤くしてぱっとはなれた。「な、何だよ君達、まさかもう…　や、やっちゃったの？」オイオイ、と砂魚の少年が呆れ顔になったが、ミャンレは悪乗りした。

「えー？　なぁに、ヤった、って。エッチなこと？　嫌ぁよ、そういうこと聞かないで。ねぇカルちゃん」としがみつき、淫猥な表情を浮かべてみせる。カルツは肩をすくめてため息をつくと、冗談と真面目が入り混じった表情になった。

「…それで、君はどうなの。うまくいってるの」

「な、何がだよ。そっちと一緒にするな」と彼は視線を落としたが、寂しそうな表情で友人を見た。「あれ以来会ってないよ。ずっと一人ぼっちさ」その様子は、彼に全く似合わないとカルツは思った。だが、ワナ少年はすぐに表情を明るくする術を知っている。

「キィフ、君に謝りたいって、あの後ずっと言ってたんだぜ。君らに何があったのかよくわかんなかったから、詳しく聞かなかったけど。思えば兵士の死は誰の責任でもないし、当たるようなことしてしまった、とか…　なんかメチャメチャ落ち込んでたなぁ。

でも、あんなひどい態度しておいて、今更きっと許してくれない、とかさぁ。そんなわけないだろ、って俺何回も言ったんだ。でもダメだったな。あのコ、思い込み激しいトコあるじゃんか」

　カルツ・ピルスは胸を甘酸っぱい気分で満たし始め、少しにやけてしまったようだった。「アイテテテテ…　何だ、やめろ」ミャンレが思いっきり、本当に死ぬかと思うほどひどく彼の脇腹を抓り、それだけでは足りぬとばかりに腕に爪を立てたのだった。…血も浮き出ていた。ワナはその様子をうらやましいと思いながら、唇を噛んで再びうつむいた。

「あのさぁ、俺…　その、もしかしたらキィフが俺を追いかけてきてくれないか、って、そう思って乗ったのも、ある。もちろんカルちゃんやミャンレと一緒に行きたかったけどさ。それは、正直に言っとかなくちゃいけない。これでダメならきれいにあきらめもつく」

　カルツは軽く頷いただけだったが、内心では本当に強く彼の想いに共感していた。もう友情ごっこは終わりらしいので口には出さなかったが、『お互い気楽にがんばろうぜ相棒』と心の中で呟いた。

　彼らは久しぶりに砂魚の少年の珈琲をやれ苦いとか薄すぎるだとか罵りながら、それまで別れ別れだった時間をうずめるための談笑に励んだ。その粉の入った硝子瓶も、残りが僅かしかないようだった。『艦長』と自他共に認める少年は、今度降りたら買い足さなくてはいけないな、そうだ、物資帳簿でも付けようか、などと尤もらしく腕組みして考えた。だが、その必要はなかった。今回がラストフライトになることが、彼らの魂の裏舞台で既に、その見えざる書類上で調印されてしまっているのだから――

こうして乗員一同新たな気持ちで、しかしやはり相変わらず漠然とした目標として元皇女の掲げる標識に従って、空の旅が始まった。ある日、船が地に在った時にどうにかして紛れ込んだのであろう、大きな蜂が室内をぐるぐる飛び回って大変な騒ぎになった。きゃーきゃーと騒ぐだけで当てにならない娘を押しやって、少年達は工具類や持ち込んだ雑誌を振り回し、叩き潰そうとした。

ミャンレは虫を怖がったが、南国から寒い空域に連れてこられ、死ぬしかないコイツも可愛そうだなと思って、運命の流れの恐ろしさ、無情さを初めて肉眼で見たような気がしたから、不思議と優しい気持ちになって、彼らに頼んだ。

「空の上にアタシ達しかいないんだよ、殺さないで。せめて外に出て、お家に帰るチャンスを与えてやって」

　彼らは『難しいこというなよ』と思ったが、死に物狂いの羽虫も何かを感じたらしく、うまいこと小窓の方へ飛んでいった。彼女がちょうどその付近で強張っていたので、彼らは窓を開けるように頼んだ。蜂は、ひょいと吸い込まれるようにして出て行った。慌てて少女がぴしゃりと閉める。「あ…」彼女は、蜂が空気圧で窓のふちに引っかかっていて、それを今の瞬間に我が手でひき潰してしまったことを知った。

「ま、外に出て寒くて凍えるよりマシだったろ」ワナがぴんと爪で虫を弾き飛ばした。それは特殊重力のために堕ちることもできずにそのまま浮遊し、すぐに見えなくなっていく。だが、彼女は窓から頭を出してそちらをずっと見送った。

『蜂さんごめん。堕ちれるといいね、堕ちれるといいね…』彼女の祈りが現実と共時的に重なりゆくように、航行の雲筋は沈星の帝都へと伸びていくのだった。

# ７、預言の答案

　地上側では当初、陽折牙の脱走を止めようという機運はそれほど強くなかった。一時は危ない橋を渡りかけたサディンカプル王国であったが、『両雄並び立たず』の言葉通りアルタクシャスの弱体化によって帝国の枠組みが事実上崩壊し、サディンカプルを実質的な盟主として、皮肉なことにあれほどバラバラだった連合の結束が俄かに強まることとなった。そのため、力押しでの地上による空域支配という今までは全く考えもつかなかった選択肢が急浮上し、彼らの涎掛けをべちゃべちゃにさせることとなっていたから、そもそも未知数の部分が多い陽折牙などはもう流行遅れの存在に思われていたのである。

　だが、一人少年達に置いていかれたサパニ・キィフ・シュイラーダートは配下のものを使って、彼らの航路が相変わらず戯惑星マーナスを目指していることを突き止めていた。ということは主導しているのはやはりミャンレ・フリスロッツか、と彼女はその美しいさらさらした長い髪を掻き乱すような仕草で呟いた――カルツ君のことは仕様がないとしても、どうしてワナ君まで連れていったの、私なんかのことはもうどうだっていいの、寂しくてたまらない――彼女は毎夜声も立てずに枕を塗らしたが、漸く手に入れた安住の生活を離れることは罪悪だと思い、早く忘れようと考え、日課に没頭した。

　だが、彼女は自分を救い出し、共に屈託なく笑いあったあの仲間達とのひと時を忘れようとすればするほど、彩り豊かに美化されて思い出され、夢に何度も見ることになった。今や彼女の人生には何の落ち度もなかったし、厳しい戦いを乗り越えてさらにたくましく、思慮深くなった提督の、意地らしいとも取れる恋慕にようやく傾き始め、全てが順調であったはずの彼女にとって、この『仲間』という一見して善良な響きは、彼女がかつて所属していた教団が用いたような、錯乱を招く薬品名称の響きに、どこか似ていないこともなかった。

　彼女の夢にはあまりワナ・クヴァイが現れず、自分を犯そうとするカルツ・ピルスや、それを支援する皇女の、非常にサディスティックな形象が見られたかと思えば、次の日には彼らと再び滝の下で出会い――その水面下には実は鯨族の海溝遺跡へと繋がる経路があって、同性の親友として十年来の付き合いであるミャンレの案内で、二人だけで楽しく冒険と遊泳を楽しんだ。それは彼女の虚しい願望であるとも、もう一つの有り得べき人生の選択肢を梵子的に象徴したものであるかもしれなかった。

　こうして彼女は寝るほどに疲れを隠せなくなり始め、初めて休養届けを出すことになった。すでに最高大神官のお膝元である第四位階まで疾風の出世速度で上り詰めていた彼女であるが、がんばりすぎるその性質を周囲のものは皆非常に心配していたから、ぜひそうしなさい、どうせなら一月もゆっくりしなさいと、別荘まで用意してくれた。彼女はありがたくそれを受け、浜辺で赤と黄が燃えるように胸中の素梵子力を落ち着ける夕日を眺め暮らした。

そしてお付のものを使いにやって、一人で浜辺を散策してみた。彼女はもう陽折牙の道筋を報告させず、彼らのことをうまく忘れることに成功していた。砂の上に敷物を置いて、ごろりと少年達の真似をしてみた。…少年達の。

『キィフ、俺…』それで、続きは何、と彼女は独り言を口にした――もちろん、彼女も恋愛方面では経験値が低いとはいえ、それほど機械のように鈍感なわけがない。ワナ君、まだ私のことを好きでいてくれてる、と彼女はあお向けに転がったまま、赤黒くなり始めた天井のような空を見上げた。

「ねぇワナ君、あのコが邪魔しなくっても私、やっぱり断ってたかもよ？」

　キィフはこう言われて彼が慌てふためく様子や、友達より彼女を優先する子供らしい仕草を思い返しながら空想し、誰もいない浜辺でくすくすと笑った。

…そして、赤い絹の薄布へと、ぽたりぽたりと雫が頬を伝う。

「嫌だわ、私ったら。今更気づくなんて…　ワナ君、戻ってきてよ、お願い…」

彼女は右手で夕焼けの陽から涙を隠した。『酷い太陽ね、こんなに私が悲しんでいるのに、自分だけあんなに美しく堕ちていく。いっそ私のことも連れて行ってくれればいいのに』その身勝手にも感じられる想いは、奇しくも『死の焔』の神女の祈りのようである。

『太陽…　太黒熱の真珠』いつかワナ少年がその名を思い出せずに皇女から怒鳴られたことを知っているわけもないが、夕陽からその名を連想し、それが愛する人を連れ去ったのだと憎らしく思った。

*――天界を、元のまっさらな状態に――沈星なんて、星の人なんて――たかが空のゴ*ミ

ミャンレから打ち明け話を聞いたときは、『へー、そうですか』としか思わず、話し手に興味を抱けなかったのですっかり忘れてしまっていたが、あの死臭漂う宴で星の娘が話したことが橙色のイメージから鮮明に思い浮かぶ。

「星を…落とす。あのコが考えそうなこと」忌まわしいことなど考えるのをやめようと思って寝返りを打った彼女は、その勢いで夕陽の赤い空気を掛け布団のようにぐいっと引き寄せ、太陽がこちらへぐわんと音を立てて飛んできたように錯覚した。「ひゃぁ」と情けない声を出して砂の上に転がり、きょろきょろとする。

「…あー、ダメね、私。何だか本当に疲れてるみたい」だが、彼女に幻影を見せた深い部位の心が囁く。*『あの子達と仲良しさんになりたかったんでしょうけどね。…逃げないで、事実から。落ちた星はどうなるの。もともと沈んでるのよ。それがさらに、どこに沈むの』*

「………大地…！」彼女は、既に日が落ちて薄暗い中、適当に布を畳むと急いで戻り、部下に命じて提督に取り次いでもらえるよう計らわせた。でも今日はもう遅いのでどうか明日に、と休ませようとする彼女らに高位司祭は「わかりました」とだけ言って、自分で王宮付近の司令部まで歩いていこうとした。やむなく馬車が呼ばれ、使者が飛ぶ。

　アルシュマイナー・ローテンハイツのほうでは、こちらも色々と頭を悩ませ、夜まで将校を集めて今後の作戦などを考えているところだったから、『まさか彼女のほうからデートの誘いか、なんと間の悪い、しかし背に腹は変えられぬ』と、国家の軍略が腹なのかい、という自分のツッコミも無視してホクホク顔で玄関まで出迎える。

「これは、このようなむさくるしいところに良くぞおいでくださいました。しかし何分会議中でありまして、特別のお話なら、そうですね、あと三時間ほどしましたら私の方からお伺いを…」キィフは翼持つ少年のように首を強すぎるほど強く振ってさえぎった。

「星も地上もないのです、ローテンハイツ提督。世界が滅びる話があります。すぐに船団を整えなければなりません」

　彼女の髪を振り乱さんばかりの剣幕に、さすがの『黒い巨人』も一つ返事で会議内容を変更するしかなかった。翌日早朝から新しい旗艦として就航したブルカス級を中心として陣形を組み、サディンカプル艦隊は空域に上がり始めた。それより一足早く、夜通しで慧栖架を引っ張った掴光が戯惑星ナ・ロに着き、従属したモクハース族の拠点で一番足の速い小型海牛と船員を借り、休むことなく陽折牙を追った。

サパニ・キィフ・シュイラーダートは出発前にアルシュマイナーが彼女の腰を抱いて唇を合わせようとするのを断り、こう言い残している。「警告し、やめさせます。でももし、それができなかったら、あなたの所へ帰って、…撃沈するしか…　ありません」

「では、その時までお預けなのですね」彼がこういったので、もしワナ君がいなかったらそれも勘違いにはならなかったのに、とキィフは思った。だが、彼女は否定せず曖昧に頷く。そうしなければ、彼を利用できないと思ったからである。

　雪聖の司教は乗り手に還ったことを少し誇りに思いながら、恒星シャルダの強い重力に引っ張られないように全速で推進する船の中、休憩室も使わず慧栖架の操縦席に入りっぱなしで眠ったり食事をしたりした。「カルツ君に、私は何を言ったのだったかしら」彼女はこういって自嘲した。

「…私も、自分の利益ばっかり考えてるわ」モウオワリネ、コノワタシモ、と何となく彼女は星の言葉で機械的に呟いてみた――

　恐らく沈星帝国から完全に目の仇にされてしまったであろう陽折牙の航路は、一路帝都目指して真っ直ぐに、とはいかない。敵には絶対に見つからぬよう、以前にもまして慎重に哨戒部隊の網の目をくぐるようにしてあちこちへと進み、時には引き返して別の経路を模索しなければならないこともあった。そのおかげでもう飛び立ってから半月も経過していたのに、彼らはまだ沈星チンバシ付近の雲を彷徨っていた。

こうしたわけで、サディンカプルの第一の追っ手が彼らの背後を取るのは時間の問題であった。それに、いずれにせよ子供達の目標は決まっているのだから、航跡を辿らずとも先回りすることすら可能なようにも思われる。ところがキィフ達も当然、帝国の空域を自由に飛んで良い訳ではないから、様々な手を駆使して何とか掻き分けるようにして進まざるを得ない。例えば『貴国にとって敵であり、我が国にとっては裏切り者である飛空挺が貴国領空に侵入している。貴国に迷惑をかけぬよう自分達で始末をつけたい』と通信し、それで通れないようであれば賄賂として癇手形強い契約梵子術の力を持ち、約束の金を支払わないと大災害が起こるとされる。地空国交に多く使われたを乱発した。

　今やサパニ・キィフ・シュイラーダートにとってはサディンカプル王国のことすら小事に過ぎなかった。彼女には胸中が熱く燃えさかるように感じられていたが、雪聖の乙女はそれが文字通りの神がかり的な使命感の衝動であるという事実に眼を背け、それがワナへの恋慕だと思い込んでいた。

だが、彼女にその力を与えたはずの炎の神は、彼女を派遣したことで自らの務めを果たし、もはや黙って自分の領分を守り、干渉していないはずである。それにもかかわらず、彼女は慧栖架の中で夢を見たとき、このような声すらはっきりと聞いた*――ワナ・クヴァイこそは私の子である。あの白い翼が輝けるとき、我が意志もまた、世を照らし出すであろう。彼を死守せよ――*興奮冷めやらぬ面持ちで目覚めた時、『だからあんなにヴェシュマの扱いが上手だったのね』と彼女は自分のことを脇に置いやって納得した。

地上を救わねばならない、そしてそこで愛する人と幸せを掴みたい――確かに、キィフはかなり焦っていたようだ。死の焔と火神教という信仰の両面において高位にあった彼女ともあろうものが、『白い翼』などといったキーワードを聞いても、それを自分の神の啓示と勘違いしてしまうくらいだったのだから――

かなり精度の高い梵子術による占いの資料として天減周期表を小まめに付けている少女のおかげで、ポソのカルスト地形上空、戯惑星ハイコ付近に陽折牙が到達したその日が12月21日であることを少年達も知ることができた。ここまで来ればマーナスもあと僅かである。生命反応を捕捉する糸鳥星者に飼いならされた機械生命体の一種。どもに気配を察知されないように甲板にはあまり出ることができなかったが、本来兵士達が息を詰めて剣を用いない戦いに明け暮れるはずの管制室内でカードゲームをやったり、それぞれお気に入りの椅子に座ってうたたねをしたり、…彼らに言わせればまさにこれまで毎日が大忙しであった。

船外は冬の北国クナウザスでは地図上で中央が暑いのではなく、火神が住む南のゼレファスからの距離に応じて寒くなるであるが、陽折牙は自分で暖房をつけることができなかった。しかし、『サムイーサムイー』と不思議な動物のように鳴いて少女が艦内をうろつきまわった結果、廊下の配線盤と思われたものが実は空調制御盤であったことをついに発見したのである。これでカルツから病気が移ったように三人のボンヤリ度は強度を増し、昼に起きてご飯を食べて昼寝して、ご飯を食べると夜寝てしまう、といった始末であった。いつでも出航できるようにと、いろんな意味で砂魚の少年にとっては面白くない粉末以外の、水も食料も短い隊長時代に十分に蓄えてあったから、その方面での心配は全く無かった。

こうして互いの睡眠時間帯がバラバラになっていき、今では一日に一回はポーカーでご飯を賭けることにしていた少年達はともかく、星の少女は起きた状態で彼らにほとんど会わなかった。それは、友人に変な気を使っているのか少し恥ずかしいのか、ミャンレのベタベタを前以上に避けるようになったカルツへの不服の表れでもあったのだろう。

このような不健全としか言いようのない状態だったから、鬱屈した若さが密室の男女にどういった悪影響を及ぼすかは、教育者ではない陽折牙にはわからないし、関与の仕様が無いことである。そして、小さな不祥事にも似たことが23日、起きるべくして起きた。

かなり朝早く起きていたミャンレは、あいつら弱くて相手になんないけど、久しぶりにカードの指南をしてやるか、と思って少年達の寝室を勢いよく開けた。しかしそこにはワナ・クヴァイだけがほとんど裸同然で寝ており、酷い寝相で布団もはだけていた。

「んもー、いくらアンタがバカの鏡でも風邪ひくでしょ」彼女は仕様のない子供達だ、昨日酒飲んでエッチな話しにでも盛り上がったに違いない、もう一人はまだ上の部屋で大の字か、と思いながら布団をかけてやった。そして、ワナの寝顔をぼんやり見つめ、…少しずつ、顔を近づけていった。

『ふーん、あのキィフが惚れるんだから、強ち不細工でもないんだよね』彼女は本人より遥かに早く雪娘の気持ちに気づいており、だからこそ思い遣りのつもりで浜辺であんなことを言ってみたのだ。星の娘は、あ、マズイな、と急にドキドキし始めた胸を押さえようと手をやった。――前に貰った羽、どこ行っちゃったっけ。もう一枚頂戴、っていってみようカナ…　――しかしため息をついて首を振り、こっそりとその場を離れようとした。

「…なぁ、カルちゃんとさぁ、いつやってんの。俺、けっこう気ィ使って寝る時間ずらしたりとかしてるんだけど」彼女が振り返ると、飛竜者の少年は寝ぼけ眼でもなく、かなり前から起きていたような感じであった。ミャンレにはそれが何か怖く感じられたが、まさかワナ坊主でしょ、とせせら笑った。

「嫌だぁ、声とか聞いて悪い遊びしちゃうんでしょ」彼女はベッドに顎を乗せてニヤニヤ笑った。だが、ワナ・クヴァイは一切いつもの冗談や笑いで応じず、彼女の手首を掴んでぐいと引き寄せた。「やっ、何!?」

「お前、なんかむかつくんだ…　いや、ミャンレが悪いんじゃない、…でも、いっつも薄着でうろついてるしさ、カルちゃんにくっついているしさ。なめてんのかよ、男を…」

「なーに、アタシとしたいわけ？」

彼女は唇を青く震わして、ひきつった笑いを浮かべた。

「誰だって男ならそうだよ。俺のことは嫌か」ワナはほとんど泣きそうな顔である。

「…別に、ヤじゃないよ。アタシだってカルちゃん何もしてくれなくて、むかついてるし…」

『面倒みる』なんて馬鹿な冗談言ったからかしら…　サイアク、と彼女は思ったが、キィフに見捨てられたと感じているであろう少年のことが仲間として可愛そうになり、思わず心にもないことを口走ってしまった。

だが、ワナ・クヴァイにはそれが了承としか感じられず、彼女の背に腕を回すと一気に引き込んだ。

『たいしたことじゃないはずだ、彼女にとっちゃ俺なんか何人めだ？　かまやしない。カルちゃんだってこの女のせいで苦しんだはず、カルちゃんの仇だ』彼の理不尽で身勝手極まりない理論がその手足を動かしていた。ミャンレは暴れようとしたが、身がこわばったようになって声も全くでない。

『薬を…』しかし、男に弄ばれるときには必ず飲まねばならなかった天空梵子技術により調合した精神剥離剤は、まさかこんなことになろうとは予測もしていなかったのだから、彼女の部屋に置きっぱなしのままである。

「こうか、確かこうするんだろ」完全に独り言になった男の声が彼女の耳に悪夢の再来を告げる角笛のように響いた。『痛い、痛いよぉママ…』と彼女は声にならない声でカルツを呼んだ。ミャンレは錠剤の力で自分の心を強制的に分裂させ、性行為を愉しむ別人格のようにして乗り切ってきただけなのだから、実際には総体としての自我は、その時何をしたのかはよく覚えていない。あの薬の力がなければ侵入を受けている体細胞も何が何だかわからないという風におびえ、硬直するばかりである。いつもの態度などは砂魚少年の知ったかぶりと何ら変わらない、耳年増の強がりでしかなかったわけである。

　彼らは何度か酷い音を立ててガタガタと不一致な揺れ方で蠢いていたから、背後で部屋の扉がこっそりと開き、呆然としながらも息を潜めて別の少年が中を伺っていたことに、乱暴狼藉を働いている男は全く気づくことができなかった。

『何で、何で助けてくれないのカルちゃん！』少女だけが彼の気配を見抜き、無言で叫んだ。しかし愛する少年は動こうとしない。『こいつらサイアクだ』彼女は腕を突き出し、ワナの首を絞めるように掴んだ。彼はのけぞって避わしたが、これでようやく我に帰ることができたようで、下になっている少女が青ざめた顔を白くさせ、涙の筋が両脇にとめどなく染み込んでいくのを呆然と眺めた。そして慌てて、盛りのついた犬コロのようになっていた自分を引き抜き、「ミャンレ…　僕は死ななくちゃいけない」と言った。

「いいの、別にいいの」カルツがまだ外にいることを確認しつつ、気取られぬように扉の方を見ないで彼女はワナの頭をはだけた胸に抱き寄せた。

「キィフのことが好きなんでしょ。それなのにアタシなんか抱いてくれて、ありがと」焼討ちにあって以来短髪が気に入ってしまって小まめに散髪している彼の頭を見下ろす眼差しが、今では失われて久しい邪神の巫女のそれであることに気がついていたら、ワナ少年は恐怖のあまり絶叫して船を飛び出していただろう。

「ごめん、ごめん…ミャンレ…」彼は肩を震わせて泣き出した。彼女は優しく彼の背を撫でながら心で呟いた――いいの、いいのよ。アナタハ、シヌンダカラ――

　忍び足で機械の友人の頭部に戻り、砂魚の少年はいつもの座席で腕を組んだ。震える足を落ち着けようとして何度か貧乏揺すりをしてみるが、陽折牙がうるさいと言うだろうかと思ってすぐにやめた。『何だ、面倒…って、マジでかよ』彼には友人のことも、信じかけていた少女のことも、何もかもが胡散臭い社会全体の回し者にしか思われなくなっていた。そしてその日はそのままそこで寝て、他の二人も別々の部屋で眠りについたようだった。

*『ご主君、ハイコ表面1-0-8に本艦のデータにない軍事基地が見えます。新型のレーダーを装備しているかもしれません。解析し、場合によっては離脱します』*23日朝、カルツ・ピルスはこういった音声で起こされた。画面を見ると、基地というよりは獣の囲いのようなところに、相応しく前に見たことのある犬どもが群れなしていて、その中央に巨大な戦艦のようなものがあった。それはしかし塗装がまだ斑で、基幹中学の理科で拡大鏡を通した、血をいっぱいに吸ったダニとしか見えなかった。

「何だありゃあ…　なんかやばくないか。今すぐ逃げよう」

*『…に間違いありません、ご主君。本艦は、この戦艦の試作として設計されました』*

「ああそう、お前の兄弟かぁ。じゃあ仲間に引き入れようぜ」そんなの無理に決まってるよな、さぁ撤退、と思ってカルツは緊張した笑いを友人と共有しようとしたが、機械にはそういった詰まらない冗談は通じず、陽折牙は律儀にも『兄弟』の解説を始めた。ちょうどその時、久しぶりに機械の声を聞いた二人も階段を上がってきた。艦長気取りの少年は『昨日アレから何回やったんだか。俺が知らないと思ってんだろうけどさ』と思って一瞥をやっただけだが、ミャンレの方でもその態度を『マスカキ男の癖に』と睨みつけた。

*『陰折牙には重力変圧弾による爆撃能力があります。これは、空域研究の粋が集まったものです。空域中で特殊重力を吸い込んで加工し、地上に落とすと、一帯の植物以外の高等動物のみを死滅させることができます。ガス兵器のように土壌を汚染したり、爆撃によって利用価値の高い拠点を壊す危険もありません。本艦のごときは、上空でこの船を護衛する任務を持ちます。*

*この戦艦が就航すれば、地上勢力がどのように対空設備を整えようと、すり抜けて要地だけを殲滅させることが可能と推測されます』*

「ああナル、それで陰陽ね。…さ、迂回しよう」バカ皇子が言ってたのと随分違うが、あの程度の奴が軍事機密を教えられてる方がおかしいな、とカルツは思い、顔の前で手を振って、そんなヤバイものからは早く離れなければいけないことを当然のごとくに示した。それが乗員の総意であると。しかし、青ざめながら震えて陰折牙のことを聞いていたワナは、突然走り出して階段を引き返していった。残った二人が『？』という顔で眼を合わせる。

左横の空間に小さな映像枠が発生し、が手動で射出口を開けようとしているのを映し出した。『カルちゃんふざけないで！』と星の娘がきっと睨むが、カルツはわけがわからないといった風に首を振り、…あ、と叫び、通信機に向かった。

「ワナ、何してる！」

『…俺、アレを壊してくる。その後で追う、先に帝都にいってくれ！』

*『格納庫…　開門します。…閉門します』*状況と命令がちぐはぐになっているのですっかり混乱した陽折牙が、半分蓋を開けようとしてカルツに叱られ、閉じ始めた。しかし、その隙にスルリとワナは外に出てしまった。

「アンタ、自分のやってることわかってるわけ！　そんなことしたら、アンタが死ぬだけじゃなくて、アタシ達も、こんな敵地の奥で囲まれちゃうのよ！」ようやく状況を理解したミャンレ・フリスロッツが激昂して叫んだ。

『すまない、でも俺、こうするしか…　こうするしか思いつかないんだ。キィフなら、きっとこうしてる！』

　やっぱりただの熱血おバカさんだったか、とカルツはどんよりした眼差しで惑星を目指す機体を眺めた――キィフ、キィフ、か。お前ばっかりが好きなんじゃないっての。それに、昨日は随分いい思いしたんじゃないの、別の女と。お前こそサイテイじゃねぇか。これでキィフがもし…　冗談じゃない、誰がお前だけに格好つけさせるか――

　陽折牙が雲から浮上を開始し、味方の援護に入るような航路を取った。

「カルちゃん、だめよだめ！　死んじゃうよ、達！」ミャンレがいつものように腕に絡みつくが、その着衣が少し乱れ、胸の膨らみがほとんど隠れていないことを彼は確認した。

「ワナちゃん、とでも言ったら？　悪いけど俺ねぇ、別に死ぬとか怖くないんだ。前にも言ったけど頭おかしいんだと思う。…君のために、せめて彼を助けてやろうってんじゃないか。感謝してくれてもいいくらいだと思うけど」こういって彼女の目を見ようとしないふてくされた少年の顔を、ミャンレは満足そうに見上げた。

「昨日のこと見てたんでしょ、カルちゃん…　、知ってるんだから」彼女は上着を床にポイと脱ぎ捨てながら、半ば血走ったような目で彼の目を捉えようと顔を近づけた。

「…何が。あいつのせいでどうせ見つかっちまう、それなら先制攻撃しか…」彼女に唇をふさがれ、柔らかい舌まで入れられたのでそれ以上は発語できなくなった。彼女は彼の膝の上に乗りながら目だけ計器にやり、自動戦闘システムオンのスイッチを押した。

「私、カルちゃんに助けてほしかったのに」下の方も少年の上でさっさと足から抜き去り、彼の胸に全裸の全てを密着させる。「でも、カルちゃんは…――は、見てただけだった。ひどいわ。それでどうして私のことを怒れるの？」囁きながら頭を男の首の下に入れ、耳の裏に舌を這わせる。

「…ミャンレは、誰でもいいのかよ、お、俺でなくたって…」

『違う、違うわ。カルちゃんだけ…　何これ、アタシ薬飲んでないのに！』

はそのとき、台座傍の暗がりに自分がぽつりと立っていることを知った。目の前では、自分自身が少年を取り込み、その耳元に何かを囁いたり座椅子をギシギシ言わせたりしている。

『依存性が恒常的に残存したってコト…　…これが目的だったの…』――使命、神、歯軋り――隅に追いやられた少女の未熟な自我は、漸く全てのからくりを見たような気がした。『アタシだったんだ。アタシに創られたもう一人のアタシ…』

「ねぇ…愛してる、愛してるわカルツ…」「うう、僕も…」彼はついに白状したように呻いた。古の海の巫女は彼の耳元に神託を与えた。

「今は生き残らなくちゃいけない。でも、ワナ・クヴァイが生還しても、また裏切って必ず私達の脅威になるわ。…私を愛してる？」「…っ、はぁっ…」彼は体をのけぞらせた後、剥離しそうな魂を繋ぎ止めたい一心で、震えながら彼女の両乳房を強く握った。

「…嬉しいわ。じゃあ、彼を殺して、私たちのために――」

『アタシのことなんか嫌いだって言って、カルちゃん…』

その傍らで遺言のように呟いて、主要だったはずの少女の魂が支えを失って崩壊した音を聞いてようやく安堵したものの、ミャンレ・フリスロッツの一部だったものが孤立したことによって発生した補償的精神系は、髪飾りをかきあげ、自分の虚ろになってしまった部分を取り戻そうとするかのように、少年の肉欲を貪り続けた。

　――この間、陽折牙は何をしていただろうか。何かがおかしいと感知できる能力など、人間にだってないのだからあろうはずもない。しかし、彼――と、今までは避けてきたが、この際だから便宜上そう呼んでしまおう――は自分なりの判断で、秘石の力でカルツと繋がっているデバイスを逆流的に利用し、残っているヴェシュマを操ってワナ機を支援し、陰折牙に向けて主砲を放った。だが、彼よりも高度な装甲技術で設計されている兄弟分は、さしもの荷梵子収束砲でも一撃では破壊できない。

　当然のことながら敵船とヴェシュマ、髭面どもが一挙に寄せてきたのではあるが、陽折牙は『ご主君』に報告をしなかった。というのは、疲れて彼の上に跨ったまま眠りこけている少女の近くに、もう一人の『ご主君』を感じ、機械なりに動揺していたからである。それは肉体を持っていないにもかかわらず、茫然自失のカルツ少年の傍に歩み寄って額と額を合わせ、自分の涙や鼻水をグスグスと呑み、『へへ、目がお顔の真ん中に一つしかないよぉママ。…どうしてミーちゃんのコト見てくれないの』と言った。

*『ご主君、ヴェシュマの特殊遠隔操縦を願います！　本艦はこれよりバリスタによる集中迎撃体制に入ります』*だから陽折牙は、何かがおかしいと確かに感知し、カルツの目を覚まさせるために音程を少し狂わせた耳に痛む放送をした。

「うっ…　頼む。すまない、すぐやる。どいてくれ！」少年が慌ててズボンを引き上げようとしたので、崩れ落ちるようにミャンレは傍らに座り込み、俯いたままで聞いた。

「私のこと好き？　やりたかったから抱いたの？　キィフのことはもう忘れた？」抱いた、だって、と彼は言い返してやりたかったが、彼女の暗く淀んだ目を見てぞっとし、怒らせるようなことは言えないと直感した。「キィフは…　ああ、忘れたよ！　もう、どうしようもないし。でも今はそれどころじゃないだろ」

「そう。下で待ってる。終わったら続きしよ？」そういって笑い、階段を下りていく星の娘を彼は呆然と見送った。…が、すぐに石を握り締め、意識を集中させる。

　もう一つ、陽折牙が驚いていることがあった。ワナ・クヴァイの乗るマグネーテイッシェヴェレにおいて計測される、慧栖架を超えるのではないかと思われる異常な運動性能である。それは彼の所有するデータで、推測される最もよい条件下での最高速度を遥かに上回ってしまっていたので、画面もマグネーティッシェヴェレ？未確認機？と表示が二重写しとなり、映像が焼きついて動かなくなってしまった。彼は慌ててその画面を強制終了させ、仕方が無いので『未確認機』として認識しなおした。

　他方ワナ少年は、愛する人が自分を忘れたであろうことを逆恨みするようにして、ミャンレを深く傷つけてしまった自分などは戦場で無残に砕けてしまえば良いと、涙を空圧で後方に吹き飛ばしながら思った。しかしキィフに謝る意味でも、最期にこの敵船だけは命に代えても沈めることを決意していた。

　その近くでは、ワナ機が推進するたびに翼から吹き出る輝きについて陽折牙は考えている。しかし、それもデータにない。機械にはわからないこと、それはバグを導く無駄な考えだと思って彼は戦いに集中したが、これまた普通の人間にはもっとわからないようなことである。ともかくワナ・クヴァイのおかげで陽折牙は何とか集中砲火に対抗でき、もう一発主砲を打つために力を溜めていた。敵もそれがわかるから、必死である。もはやあの『＊号機』達はその使命を全うして動かぬ物質の固まりとなっている。それでも接舷だけは何としても避けねばならなかったから、相手がそういう戦術を好まない星の軍勢であったことを彼は運がいい、と思った。

しかし*『もしもシュイラーダート様がいてくださったら』*と思わずにはいられない。そうすれば予想外の働きをするワナ様のこともあるから、まだ勝ち目がある。しかしどうやら自分にはわからない機微においてあの方は我が体躯を離れてしまったから、もはや戻ることはあるまい――それでも、やはり機械にもそれなりの神頼み心理があるのだろう、彼は無意識的に慧栖架の気配を付近一帯で検索していた。

*『捕捉。後方６根度』*こういった自分の声に、彼が一番驚いた。――*やはり来てくださった*――彼は艦長の宣言に従い、風の神に自分も感謝を捧げねばならないのかと思ったが、その方法がよくわからないのだった。

　しかし、『人間とはすばらしい』などといった幼児的な彼の感慨をあざ笑うかのごとく、慧栖架は腕を振るい、その威力は味方のマグネーティッシェヴェレを襲った。それは牽制の攻撃であったから、命中寸前でカーブしていく。

「ミャンレ・フリスロッツ、聞きなさい！　あなたが取り除こうとしている星の宝玉は、沈星全ての浮遊制御を司ってる、最も強い時空停滞の力を持つの。…わかる？　それだけなのよ！　だから、それを駄目にしたら沈星は壊れないで、そのまま地上の引力に引かれるだけ」

「キィフ、助けに来てくれたの！」ワナも無邪気な機械と同じような楽観主義を披露した。

「…ワナ？　ワナ君なの、それに乗ってるから…」

「うん、ちょっと単独行動しなくちゃいけなくて。アレを壊そうとしてるんだ。陰折牙っていって、やばい新兵器なんだよ！」

「そ、それどころじゃないのよ…　あうっ!?」素早く近寄ってきたエッセンシュトライヒェンが、すっかり動揺して彼女らしからぬ大きな隙を作った慧栖架を背中から殴りつけた。速度重視の慧栖架は装甲がヴェシュマ中で一番弱く、彼女は意識だけは失うまいと機体の損傷信号をそのまま受け入れて分かち合い、激痛に耐えながら吹き飛ぶ。

「『死神の乙女』め！　貴様に殺された我が同胞の恨み、この第一皇子コサルニッチ・ヨルクースト・フリスロッツが晴らしてやる！」

「だから何だよオメェは！」ワナは猛然と光の矢のようになってドリッテルピストーレを連射しながら敵指揮官の脇をすり抜けた。「キィフ！　大丈夫か、しっかりしろ」

「…何したの、今…　ワナ君…」彼の背後で体中を穴だらけに貫かれた皇族専用機が、力なく沈星の方へ漂っていくのをキィフは見ていた。その本数はいくら速射砲でも数十秒打ち続けないと出せないものだったし、そもそも小さな砲座にそれほど多くの矢が装填できるはずもないから、全く不可解な現象といってよかった。

「え、何が。…何だアイツ死んだのか、見かけほどでもねぇ。それより、何だってさっき」二人は声を拡張しながらぱっと分かれ、それぞれに襲ってきた犬達を軽くあしらいつつ会話を続けた。

「あのね…　あ…」彼女はしどろもどろになりながら、胸を甘い感覚で満たしつつ、ここが戦場であることも、急がなければならないことも忘れそうになっていた。

「あの水晶とかのことか？　やばいの？」え、水晶？　じゃなくて…、とキィフは思って少し混乱を深めてしまったが、陽折牙を襲ったヴェシュマにクロス攻撃を当て、彼の近くに寄った。

「太黒熱の真珠っていうんだけど、何かわかって取りにいってる？」

その口調には非難めいたものがあり、機体の中の少年は顔をゆがめた。

「い、いや」

「もう…　私達、あのコに踊らされてたのよ。あれを盗ったり壊しちゃったりしたら、星が全部流星みたいに地上に落ちて、全部ぐちゃぐちゃになっちゃう。世界の終わりよ！」

「嘘だろ…　ミャンレは知ってるのか」

「わからない。知らなかったんなら、そして、考え直してくれるなら、私は嬉しいの」

「ここでグダグダやっててもわかんない。直接聞いてみよう！」彼は母艦に機体を向けて翼を広げた。それは彼がいつも、様々な冒険の場面で自分の腕を使ってするのとそっくりだった。キィフは、それを自分がいつも憧れの眼差しで見ていたことを思い出した。そしていまや、彼の巨大な翼は白い光の粒を発散させながら羽ばたいていく。

『なぁんだ、私、ずっと前から彼のことを好きだったのに、怖くって抑圧してたんだわ。意気地なしだもの…　でも、私はこの人を一生かけて守る。

だって、私なんかじゃなかったんだ。戦神の遣わされた使徒は、本当はワナ君だったんだから…』

彼らの会話は外で通信機を介さずに行われていたから、艦内のカルツには全く聞こえていない。彼には、突然現れた慧栖架が青い機体と戯れているようにしか見えなかった。

『カルちゃん、キィフが来てくれたよ！　ミャンレそこにいるかい、どうしても話さなくちゃいけないことがある…っと！』ワナ・クヴァイは口から砲撃し、切りつけてきたヴィルベルシャテンの胸部に軽い気持ちで風穴を開けた――本来、接近戦用ヴェシュマの装甲を打ち抜けるような威力など無いはずなのに――

　無邪気な、嬉しさを隠し切れない声の音程は館内の少年を苛立たせた。カルツは歯軋りするように通信機に向かう。「いないよ、ここには。何なのさ」しかしゲンキンなもので、次の通信で彼はおよそ機嫌を直してしまうのである。

『カルツ君、ごめんなさい！　私…　友達としてやり直したい！』トモダチかぁー…と彼は思ったが、まぁ、最初からそんな風に半ばあきらめてたしな、とため息をつき、陽折牙のやり方に倣った。

「何を言ってるのかわかんないぜ、キィフ。俺達ずっと仲間だろ！　とにかく君の元気な声が聞けてほっとしたよ」

「…私に話って何かしら、シュイラーダートさん」いつの間にかミャンレが下の座席にいて、別の通信機から味方に話しかけていたので、自称艦長は心底驚いてしまった。

『ミャンレ…　あなたの求めてる秘石のことよ。あれは、触れてはいけないもの。どうして沈星帝国の皇女であるあなたが…』慧栖架は戦いながら通信を続けている。

「どこでお調べになったのかしらね。私も名前以外は良く知らないわ。お父様も、あれを守るのは一族の使命だって。地上に漏らせば、自殺のネタに使われかねないものね。生きたい人ばっかりじゃないわ。ご存じないかもしれないけど、アンタ達みたいに生きたい人間のせいで、死にたくなってる勢力もあるのよ、社会の根底にはさぁ」

　カルツは慄然としてミャンレを見下ろしていた。今までも彼女が自分の素を出してわけのわからないことをいうようなときが幾度もあったが、今回はまるで違っていると感じた。どこがどう違う、ということはうまく表現できないものの、彼ははっきり断じた。

『こいつ、ミャンレじゃない…』

画面上の慧栖架が動きを止めた。『…つまり、撤回しないってこと』

艦内の少女は宣言した。

「…どうでもいいわよ。ただ欲しいから取るの。アンタ達みたいに」

　――オマエタチミタイニハ――カルツの中で、似たような自分の声が機械的に響く。

*『！』*彼が現実から心を離してしまった瞬間、陽折牙の驚きが彼にも伝わった。次いで今までで一番激しい振動――画面が真っ赤な枠に次々と変化し、聴いたことのない警告音が鳴り響く。映像にはこの世界最強の軍艦に大きな傷穴が開いたことが示され、別の方面にはサパニ・キィフ・シュイラーダートのほっそりした機体が彼女の秘技を仲間だった船に放ったことが明らかにされている。慧栖架は一度ファイントとして捕捉されるが、すぐに味方機に戻される。この戦艦もまた、我が目を疑っているのである。

しかも、その一撃は陽折牙が全く防御しなかったとはいえ、風の攻撃であるはずなのに損傷部に火災が発生し、未知なる火矢のような威力であったから、あまりにも被害が大きかった。思考システムは慧栖架をもやむなく未確認機として再認識せざるを得なかった。

「転舵して。進むなら沈めます」

「な…　何やってんだよキィフ！　気でも違ったか」ワナ機がキィフ機に飛び掛って押さえつけようとしたが、彼女は逃れた。

「私じゃなくてあのコよ、気がふれてしまってる。世界を滅ぼす気だわ」

「落ち着け、例えそうでも、カルちゃんが動かなくちゃミャンレには何もできない」

「きっともう、カルツ君はミャンレの言いなりよ！」彼女は陽折牙に対して再び攻撃を試みるために両腕を広げた。ワナがその前に出る。

「どいて、早くしないと主砲の狙い撃ちになる」

「…お前…　キィフ！」ワナは初めて彼女を父親のように叱りつけた。「証拠でもあんのかよ。宝石のことなんかどうだっていい、でも、さっき自分でいったじゃねぇか、カルツと友達になるって。あいつは何て言ったよ！」

「ワナ君…」彼女は絶句して立ち止まった。だが、すぐにしつこいグラスバルトどもに囲まれ、飛び退る。そのとき、バリスタが付近をいくつも飛んだ。

「ほらっ、私を狙ってくる」「それは援護射撃だろっ」ワナ・クヴァイは接近戦が不得意とされる機械を駆使して生身でやるように爪を振り回し、輝く翼を打ちつけて敵をスライスした。

『でもホントなの、ワナ君信じて…』

雪聖の少女は泣きながら犬の群れを撃ちまくった。しかし彼女には、後ろめたい部分もあった。何しろ宝玉をどうにかすると世界が滅びる、というのはもしかしたら自分の思い込みでしかないかもしれないのである。だが彼女は彼女なりに、神の尋常ならざる力を付与されてしまっているから理屈もなく真実が見抜けてしまい、それが彼女に『進め、悪を倒せ』と抗い難い力で命じるのである。

一方、色々言われている方はどうかというと、実際に再び少女に乗っかられていた。「ねぇ愛してる？　愛してる？　どれくらい？」と一つ動くたびに聞いてくるので、彼は催眠がかかったようになり、『ふーむ、俺、愛してるかなぁ。気持ちイイし、愛してるなぁ多分』とぼんやり空想にふけっていた。その時、主砲発射可能を示す音が鳴り、陽折牙は艦体をよろよろさせながらも必死に陰折牙を狙おうとして惑星に近づいていった。

「かわいそう、私達の陽折牙…　すごく痛がってるわ。サイアクね、キィフって」

「そうだな、そういえば」彼は宝船のことすら忘れかけていたようだった。

「見て、ワナったら、あっちで私たちのことを護らずに慧栖架といちゃついてる…」

『友情って脆いナァ、雑誌に書いてあった通りだ』と彼はある種の感慨にふけりながら主砲制御を手動操作系に切り替えた。

「陽折牙、俺がやるよ。本艦に対する脅威はわかっている」

「ワナ君、私…」せっかく少年達が味方同士で争っていることにも気づかず、帝国軍は全員に見境なく攻撃したから、キィフは陽折牙から遠ざけられ、焦るように言った。

「あなたのことが好きなの、ずっと、好きだったの！」

「…バカいうなこんなときに。そんな嘘で誤魔化せないぞ、提督に何を頼まれてきた」彼は余計に悲しくなって目を力強く瞑った。

「違う、違う、違うよぉ！　ワナ君のバカぁ」彼女の涙で震える声が、直接頭に響いてきたようにワナは思った。「もう後ろに王国軍が来てるわ、あの船はどの道墜とされる！」

「やっぱそうかよ、もう嫌いだ、お前なんか」慧栖架が陽折牙へ放った斬撃を、飛竜者の乗り手は鳥の機体に雄たけびを上げさせただけで打ち消してしまった。

「俺はもう行く。カルちゃん達と一緒にどこまでも」

「そんなの嫌ぁ…　嫌だ嫌だ嫌だ…」雪聖の乗り手は泣きじゃくり、操縦桿から手を離して一切の戦闘行為を放棄してしまったので、慧栖架が首を上に傾け、手足をだらりとしてしまった。

　その上空で陽折牙の人工知能が、センサーも兼ねる管制室から二機の様子を凝視している。

*『ご主君…なぜそんなところに』*

キィフは顔を両手で覆って肩を震わせた。「…でも好きなんだ、本当に好きなんだもん、アタシも一緒に行くんだもん…」

『ミャンレ…?!　いや、ばかな』ワナは急いで慧栖架を護るためにその傍に寄った。「君ねぇ…　マジで言ってんの」

　キィフ搭乗機の操縦蓋がぱかりと開いた。彼女は右目をこすりながら何度も頷き、彼の機体に飛ぼうという仕草をしたが、停止して無抵抗の躯体に敵の攻撃が何度も当たり、よろめいてうまくいかない。

「わ、わかった、わかったわかった、俺が悪かった、俺も好きだ…　っつーか、言うまでもないってのに。なんだ、こんなのありかよ、色々コクる時のこと考えてたのによ。

さ、早く中に戻って。カルツ達のことは任せろ、うまく説得する。引っぱたいてでもだ。な？」

「ほんと…」まだしゃっくりを何度かしながら、キィフは蓋を閉め、敵に気をつけながら少し後退した。そのとき彼女の目に、回避能力を失った陽折牙を目指してもう一機のエッセンシュトライヒェンが向かっていくのが見えた。「あ…　やられる」

「兄者の仇！」

敵の放った梵気衝が前部マストに被弾し、ついに甲板によじ登られかかったとき、*『無念』*と陽折牙は思った。*『ご主君、即時退艦を…』*

「カルツッッ！」ワナ・クヴァイの機体はもはや形をほとんど失い、渦巻く光球になっていた。

「俺のダチをやらせっかよテメェなんぞに！」

彼は光の筋そのものとなり、付近の犬達をすべて焼き尽くしてしまうと、あっという間に敵機の傍に瞬間移動し、その光で飲み込もうとしていた。

「…キィフに説得されてこっちに飛んできたわ。私たちのために、カレを殺して、とか言われたみたいね」

ミャンレがカルツの耳元で囁いた。その台詞は確かに聞いたぞ、これは間違いない、とカルツは夢見心地で確信した――敵が来てる。ワナ、俺がお前を援護する、いつも通りだ。俺は裏切られちゃいない――ウラギラレタ――コロシテ、アイツ、アタシヲオカシタケダモノヨ――カルちゃん、俺、一緒にどこまでも行くよ――

　カルツ・ピルスは手動制御で主砲の引き金を引いた。その狙いは発射した陽折牙自身が信じられないほどの精度――本来は扱いの難しいこの砲撃のために支援システムがあるようなものなのだ――で帝国最後の皇子付近全体を光の柱の中に飲み込んでいった。

「…」

「…え　…えぇ？　ワナ君、ねぇどこ、ワナ君…」

　――

「ワナ！　嫌だ、ねぇっ、嫌だよぉ！」キィフは大事にしてきた慧栖架の操縦台座を両拳で幾度となく叩き、いくつかの計器盤を壊して、手を血だらけにした。『おめでと、艦長』その頭脳に、こんな声が響いた。はっと彼女は陽折牙のほうを見た。「…通信機じゃなくて、全部直接聞こえてくる」

『あなたの勝ちよ。光の戦士は死んだわ。あとは、宝玉だけね』『うん…』

「ミャンレ・フリスロッツ…」サパニ・キィフ・シュイラーダートは瞳が零れ落ちそうになるほど目を大きく見開き、周囲の風を引き寄せた。

*『なぜだ…　何が、何があった…』*陽折牙は自分が撃ち殺してしまったものの大きさに戦きながらも、ご主君を護る一心でバリスタを雪聖の機体に向けた。相手もまたひどく損傷していたから、良くて相打ち――

「慧栖架じゃ勝てない。闇の神の力が働いてる」もはや今の彼女にはあらゆる見えざる力が見えているようだった。そして、一瞬高まった緊張を解いたのはヴェシュマのほうである。彼女はさっと背を向けると、後方の味方へと飛んでいく。

「…許さないわ。あなただけは絶対に許さない」彼女は通信機を陽折牙の秘匿周波数に合わせた。

「世界とかってもうくだらない。必ず私の手で殺してやる、ミャンレ・フリスロッツ」かつての信仰に戻ることなど彼女にとっては容易なことだった――復讐の死焼神よ、我に力を。

「怖いわねぇ、『死神の焔』の神女様って」

　静かになった一体の空気に星の少女の笑い声が響いた。だが、キィフの声を聞いたカルツ・ピルスは、銃座を握る自分の手から鮮血の滴がポタ、ポタ、ポタ、と落ちていくのを目が覚めたように見つめていた。それは少女の目には見えていないようだった。

「どうしたの、カルちゃん。まだ足りない？」

彼は答えず、背後から低く響いてくる音に耳を澄ました。おそらく破損した箇所から風が吹き込んできているのだろう。まるで人の声のようであり、――いや、彼の耳には特定の声そのものにしか聞こえないのであった。

――ドウシテ、カルチャン。オレ、イタイヨ…　オレ、シンジテタノニ…――

「俺が撃ったのか…」彼は半ば呆れたような顔をして、唇を震わせた。そして、すぐに首を強く振った。「俺が撃ったのか、といったのか、今僕は。…そうに決まってる、なのに自分は操られたとか考えたわけだ。弱さを棚に上げたわけだ」

　自嘲するように独り言を続けるカルツに、ミャンレは暗黒の力に満ちた眼差しを向けた。

「変よ、カルちゃん。一体何を悩んでるの？　あなたは勝ったのよ。『死神の乙女』だって、なすすべなく逃げ帰ったわ」

だが少年は、時の血を伝って復活した邪教の巫女の眼を正面から逃げずに見据えた。「もう無駄だ、ミャンレ。いや、正直、お前もう誰だかわかんねぇけど」彼は血塗られた手を見たが、彼にとって唯一の親友だったであろう少年の血液はもうどこにも見えなくなっていた。彼はそれを寂しいと思った。

「俺は自分の間抜けで、友人も、好きな人も、自分自身みたいにムカツクけどまぁ一緒にいてやらなくもないか、ってくらいの奴も、みんな失っちまった。

もしかしたら…、はは、違う。確実なことだ。俺がお前たち皆を利用して、漠然と何か恐ろしいことを企て、呪い、無意識で実行し続けていたことは。…お前を怨んじゃいないよ」

　ミャンレ・フリスロッツは彼の話しを聞く余裕もなく、戦慄しながら必死に見えざる力を発している。『が効かない…　なぜ、何の力…』――彼女を汚した第三皇子がこの『神官』によって潰された時に発した問いと、奇しくもそれは同質のものだった。

『天ね…　おのれ光の継母め。貴様にも利するはずの我が計画…

憎き地上の滅壊と、空虚ゆえに真に幻なる美しき天空のみの世界構築。

ふん、疑実在としての己が誇りも捨て、結局は現れて他神に尻尾を振るか』

「違ぇよ。俺は誰にも仕えねぇ。神なんて、毛ほども助けちゃくれなかった」

カルツは何の努力もなしに彼女の思念ガードをすり抜けて思考を読み、このように告げた。彼は『浸透の秘玉』を手のひらに置いて彼女の前に突き出している。それは何か得体の知れない水蒸気のようなガスを発生させ、宝玉自身の光によって淡く青色に染めていた。

　今やこの少年に対してはあらゆる術力が呑み込まれるように打ち消されたり、透過されてしまうので、彼女はあきらめたように肉声を発した。「幻天空、光、闇…　其れら虹の交錯…」ミャンレは答えの寸前までいったようだったが、到達できずに両手で肘を胸の前に押さえた。

「もしかしてあなた伝説の…」

そう思ってみると、彼の額から透明な突起が出ているようにも見えた。しかし、『まさか』と思ったとたんに消えてしまう。そうこうするうちに、彼という人間に対して発生した興味が『計画』へのそれを再び押しやり始めた。彼女は自分の中に、『ママ、アタシね、ママのことね…　うーと、オシエナイ！』という声を聞いた。

「…カルちゃん、アタシのこと愛してないの、愛してるっていったじゃないよ」ミャンレは髪を振り乱し、自分が何者かもわからなくなってすがりつくようによろよろと彼の膝を掴んだが、少年は煩そうにそれを蹴り上げるようにして解いた。

「！

…抱いてる時だけ？　体だけなの」

「かもな、知らん、そんなの」彼はひどい男を演じようとしてそういったのだが、あのキィフですら抑えた術法力にやられていたから、哀しいかな事実としても、本当にほとんど何も覚えていないのだった。

「そんな、嫌だよ、カルちゃんずっと一緒にいるっていったじゃない、お家作ってくれるっていったじゃない！」

『――カルちゃん言って。

アタシのこと嫌いだって、ホントのこと言って――』

　彼は二種類の入り乱れる声を等しい音量で聞き、そのどちらをも級友だったら『しょうもない』と思うだろうと感じた。『…でも俺は多分変質者だからな、普通とは違う感想を持っちまう。なぁそうだろ』彼は久しぶりに周囲のガヤガヤに耳を済ませようとしたが、今やそれらは完全に彼の広漠とした精神域に見境なく飲み込まれて一致していたから、何を話すということもなかった。仕方が無いので、彼は一人で考え、言った。

「何回も言わせてもらうけど、俺が好きなのはキィフだ。オレは彼女に勝ち、力づくでも俺の女にする。消えナ、ミャンレ。お前のことなんか大嫌いだ」

それがオトコであり、オトナってもんだ、と彼は付け足そうと思ったが、さすがにウソが並びすぎているので自分でも嫌気が差して控えた。

「…可愛い鯨の赤子を見る度に、アタシのこと思い出すんだから！」彼女は泣きながら扉を開けて走り出していった。もはや船の中にはヴェシュマも蛸壺もない。陽折牙の目は、彼女が甲板の手すりから身を乗り出し、空域をふわふわと泳ぎながら半壊した陰折牙に近づいていくのを見た。

「バカだなぁ、鯨なんて海嫌いの俺が見に行くわけないだろうに」それがミャンレ・フリスロッツにおける『巫女』としての予言力失墜を示していることを、カルツ・ピルスが知る由もなかった。しかしその原因として彼は、不完全な二人が入り混じったような『大嫌いな』娘が、多くの犠牲を払いながらも結果としてこの試練を通し、然るべきより高い霊格の女性へと統合されていく進化の筋を、観たような気がしていた。

「ま、これでホントのホントにさよなら。思えば僕ら喧嘩ばっかりだったね」砂魚者がどっかりとお気に入りの席に深く腰を据えた。「でも間違いなく、先に君を好きになったのが俺だってことには、胸を張れる」

*『ご主君…　ご主君どこへ行かれる』*彼は、まさか二人になったご主君同士が陰陽に分かれて最終決戦を…云々と、彼なりに、真面目に悩んで展開を考えてみた。しかし、そういったことはもちろん陽折牙のようなある種素朴な『人間』には不似合いなことである。

　星表面に着く前にミャンレ・フリスロッツは兵士達に止められ、一先ず捕虜として連行されかかった。しかし彼女が『自分は今唯一の皇位継承権を持っているものよ』というと、彼女が皇女である身分すら剥奪されているということも忘れ、それは確かにそうだ、と基地の生き残り達は納得して解放してしまった。

もちろん、捕まえて彼女の腕に触れた瞬間、何らかの天空系か邪教系精神干渉が彼らを浸食していたのである。

「――キィフのやつ、殺したのは俺だってのに、ミャンレとか言ってたな。無視しやがって。ここまでコケにされて黙ってられるか」

少年は自分の中に無理やり、憧れの人に対する捻じ曲がった想いを掻き集めだした。『ワナのことが好きだったんだろ。犯人を殺させてやるよ。そしたら少しは君の役に立てるかな、俺…』

*『…ご主君…　本艦の航路は　…目標を　…喪失…』*

陽折牙には涙を流すことで悲しみの痛みを少しでも和らげるような能力など与えられているはずもなかったから、仲間を一度に失った寂しさによってすっかり思考回路が麻痺してしまっていた。だから、マーナス方向より出現した大艦隊が取り囲むように近づいてきたときにもほとんど無抵抗であった。カルツはその様子を、消えてしまった映写画面の向こう側の窓辺でじっと見つめた。そして無反応の計器を撫でながら、新型で『間違いのない』陰折牙のシステムならこうはなるまいと思った。

「こんなことじゃ駄目だなぁ。…ま、俺は君のそんなところが好きなんだけどさ」